兵庫県文化財調査報告　第247冊

三　田　市

田中一の坪遺跡

―（一）福住三田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2003年2月

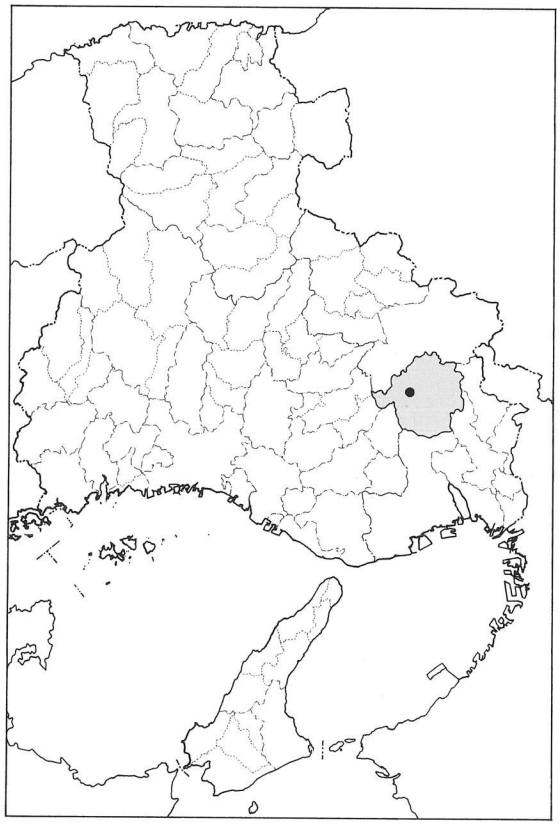
兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第247冊

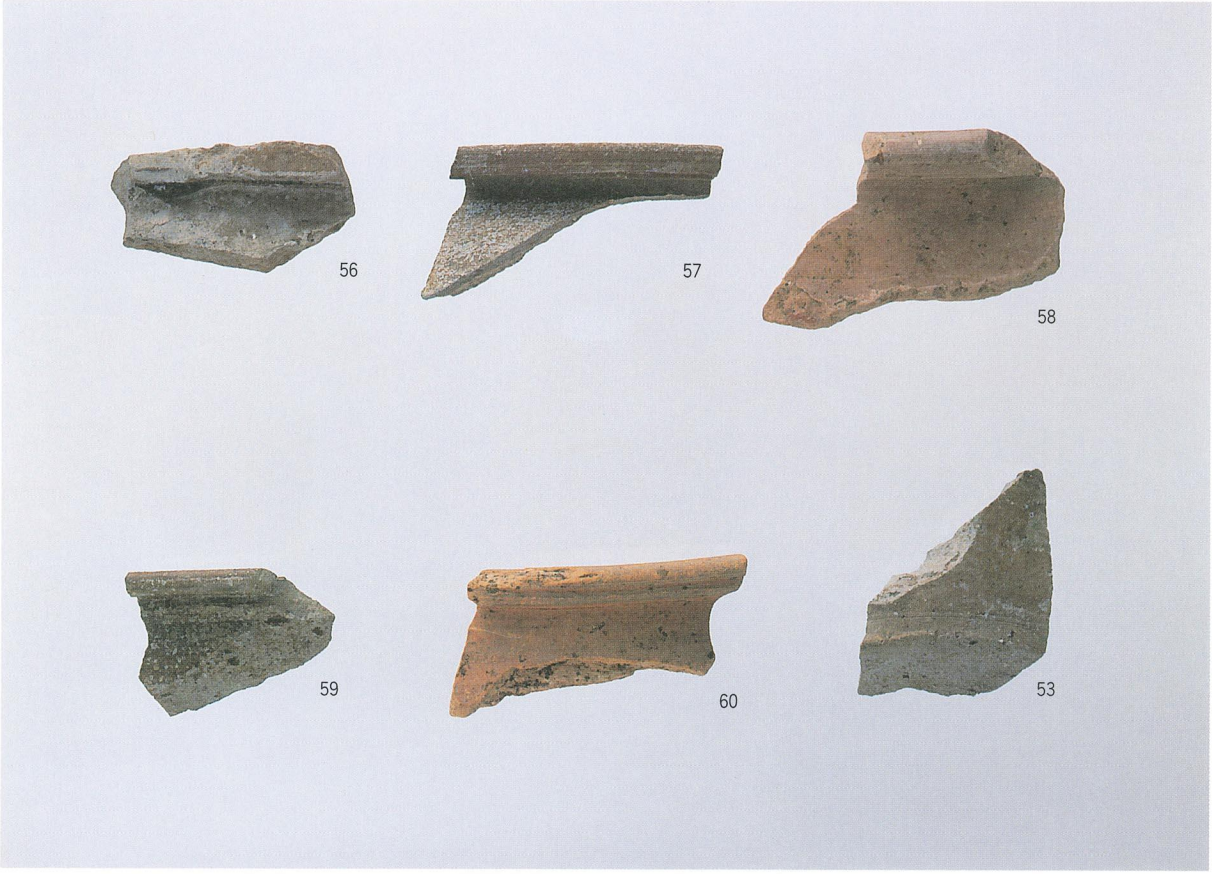
三　田　市

田中一の坪遺跡

―（一）福住三田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―



遺跡周辺航空写真（国土地理院撮影）



丹波焼出土遺物（1）

丹波焼出土遺物（2）

例　　言

1．本書は、兵庫県三田市東本庄に所在する田中一の坪遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は（一）福住三田線道路改良工事に先立ち、兵庫県北摂整備局土木部の依頼を受け、兵庫県教育委員会が昭和63年９月に確認調査を行い、平成元年度に全面調査を実施した。

3．遺跡の出土品整理作業は、平成14年度に兵庫県阪神北県民局（県土整備部三田土木事務所）の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

4．本書の執筆分担は、本文目次に示している。

5．本書の編集は、小川良太の指示のもと村上泰樹がおこない、松本嘉子がこれを助けた。

6．図版に収録した写真のうち、遺構は小川・村上の両名が撮影し、遺物は(株)イーストマンに撮影を委託した。

7．本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の25,000分の１「藍本」地形図を使用した。

8．本書中の標高値は、東京湾平均海水面（TP）を基準とした海抜高度で示す。本書で使用した方位は磁北である。座標北は磁北からＮ７°Ｅ（昭和57年現在）である。

9．発掘調査・整理にあたっては、下記の方々のご指導・ご助言を得た。
高島信之・山崎敏昭・中井秀樹・田中賢人（三田市教育委員会）、徳原多喜雄（氷上郡教育委員会）、河野克人（篠山市教育委員会）

本　文　目　次

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯……（小川）　1
第２節　出土品整理事業……（小川）　2

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境……（村上）　3
第２節　歴史的環境……（小川）　3

第３章　遺　　構

第１節　遺構の概要　……（村上）　6
第２節　掘立柱建物　……（村上）　7
第３節　竪穴住居　……（村上）　8
第４節　土坑・溝……（村上）　8

第４章　遺　　物

第１節　古墳時代から飛鳥時代の遺物……（村上）　10
第２節　中世・近世の遺物……（村上）　11

第５章　結　　語……（小川）　14

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡……2
第２図　遺跡周辺の地形……4
第３図　遺構出土土器……10
第４図　金　属　器……12
写真１　金　属　器……12

表　目　次

表１　出土土器観察表……13

図　版　目　次

図版１　遺跡の位置
図版２　遺跡全体図
図版３　土層断面図
図版４　SB01・02
図版５　SB03・04
図版６　SB05・06
図版７　SB07・08
図版８　SB09・10
図版９　SB11・SK04・05・06・07
図版10　包含層出土遺物（１）
図版11　包含層出土遺物（２）

写　真　図　版

巻頭図版１（カラー）　遺跡周辺航空写真
巻頭図版２（カラー）（上）丹波焼出土遺物（１）
（下）丹波焼出土遺物（２）
写真図版１（上）田中一の坪遺跡遠景(南東から)
（下）調査区全景(北東から)
写真図版２（上）調査区全景(南西から)
（下）調査区全景(南西から)
写真図版３（上）SB01(西から)
（中）SB03(西から)
（下）SB04(北から)
写真図版４（上）SB05(北西から)
（中）SB06(東から)
（下）SB08(西から)
写真図版５（上）SB10(東から)
（下）SK06(東から)
写真図版６　出土遺物（１）
写真図版７　出土遺物（２）
写真図版８　出土遺物（３）
写真図版９　出土遺物（４）

第1章　調査の経緯

第1節　発掘調査の経緯

三田市においては、1970年代の高度経済成長期において計画・着手された新市街地（ニュータウン）の建設と、それに付随して全市において都市基盤建設並びに、都市近郊農業をめざした諸整備事業が施工されていた。その中で三田市北西部における今回の調査地を含む東本庄地区においても、農業の生産性向上と機械化導入を目指した事業の一環として圃場整備事業が実施されていた。それに伴って兵庫県北摂整備局においても、当該地域の中央部を縦貫する一般県道福住三田線の改良（拡幅）工事を行うことになった。

事業地域においては、大規模な圃場整備工事の進行とともにこの圃場整備事業の事前調査として、三田市教育委員会による埋蔵文化財調査が実施されていた。当該地域はそれまでにも、丘陵麓・山頂における若干数の古墳・山城等の遺跡の存在が知られていた。しかし、これらの事前調査の結果、地域の中央を貫流する武庫川両岸の水田地帯にも、多数の遺跡の存在することが明らかになり、道路改良事業の実施にさいしても、事前に埋蔵文化財調査の必要に迫られることとなった。そこで兵庫県北摂整備局の要請を受けて、兵庫県教育委員会においても調査の対応をすることとなり、路線拡幅予定地域において遺跡確認調査を実施する運びとなった。

確認調査は昭和63年９月に実施した。調査は東本庄の田中集落地先、約200ｍの範囲を対象とすることで調査を開始した。確認調査の結果、東本庄田中地区における道路計画センター№79～88の間約180ｍに渡って遺構・土器の出土が認められた。遺跡は丘陵麓の緩傾斜地の水田に立地しているために、水田ごとに遺構・遺物の残存状況が大きく異なっていた。確認された遺構は土坑・柱穴跡等であった。出土土器は、平安～鎌倉時代のものが最も多く、次いで室町時代のものがみられた。他に、古墳時代の須恵器片もみられた。以上のことから当遺跡は、鎌倉時代を中心とするかなり時期幅のある集落遺跡ではないかと推測された。

以上の確認調査の結果から、道路改良事業に先立つ全面発掘調査の実施が必要と判断された。兵庫県北摂整備局と兵庫県教育委員会の協議の結果、次年度に全面発掘調査を行うことで合意した。年度が変わって平成元年に改めて、兵庫県北摂整備局より発掘調査実施について兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に依頼があり、11月21日より平成２年１月８日まで現地調査を行った。

なお、この年度より本格導入した発掘調査作業の労務委託請負制度により、調査作業は(株)マツダ建設（現場代理人　松田公子）により実施した。

昭和63年度	調査担当者	兵庫県教育委員会社会教育・文化財課	岡崎　正雄・岸本　一宏
平成元年度	調査担当者	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	
		調　査　員	小川　良太・村上　泰樹
		調査補助員	西本　寿子・高島知恵子
			藤田　里美

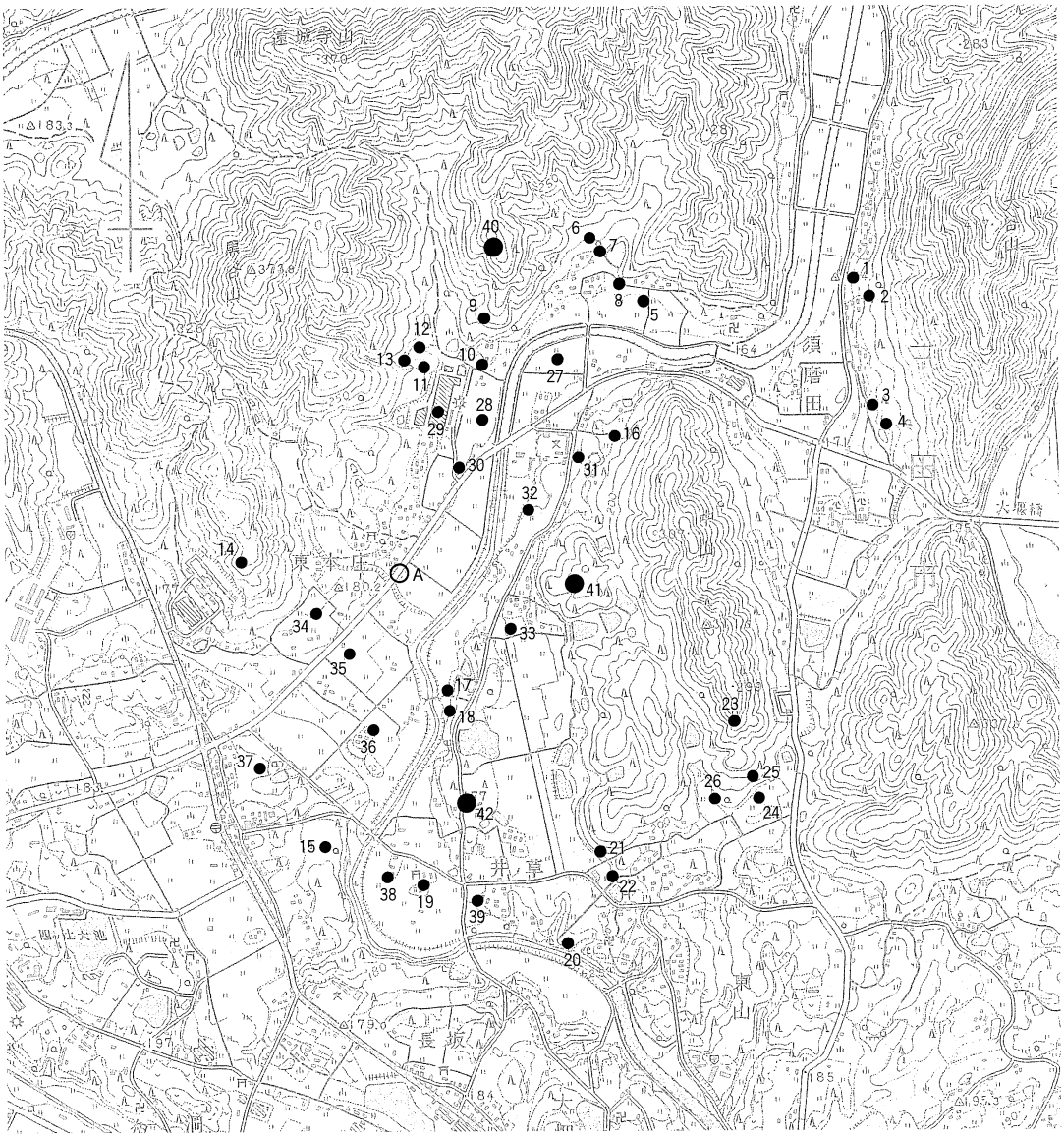
第２節　出土品整理事業

出土品整理事業は、平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

整理事業担当者　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

整理担当者　　小川　良太・村上　泰樹・深江　英憲

嘱託職員　　松本　嘉子



第１図　周辺の遺跡（国土地理院発行 1/25,000「藍本」）

A．田中一の坪遺跡
1．烏帽子形１号墳
2．烏帽子形２号墳
3．大谷１号墳
4．大谷２号墳
5．東家地古墳
6．茗荷谷１号墳
7．茗荷谷２号墳
8．茗荷谷３号墳
9．城山古墳
10．田中田古墳
11．黒谷１号墳
12．黒谷２号墳
13．黒谷３号墳
14．東本庄松本古墳
15．振木古墳
16．嘉正寺古墳
17．沢山１号墳
18．沢山２号墳
19．宮ノ谷古墳
20．川向古墳
21．沢１号墳
22．沢２号墳
23．井谷古墳
24．大戸ノ松１号墳
25．大戸ノ松２号墳
26．大戸ノ松３号墳
27．東向・藤ノ木遺跡
28．田中稲屋田遺跡
29．田中北家地遺跡
30．田中五ノ坪遺跡
31．東向若宮遺跡
32．東向・地蔵家地遺跡
33．東向墓ノ谷遺跡
34．西安北野家地遺跡
35．西安北芝遺跡
36．西安中筋遺跡
37．亀ノ森古墓
38．井ノ草宮ノ谷遺跡
39．井ノ草沢遺跡
40．本庄丸山城跡
41．森本城跡
42．鳥山城跡

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

1．地理的概観

田中一の坪遺跡の所在する三田市は、兵庫県の南東部に位置する。北は篠山市、東は川辺郡猪名川町・宝塚市、南は神戸市・美嚢郡吉川町、西は加東郡東条町・社町とそれぞれ境界を接する。

三田市の北側および東側の篠山市、猪名川町との境には、標高700mを超える大野山(753.5m)、弥十郎ヶ嶽(715.1m)を中心に三国ヶ岳(648.2m)など600m級の山々が連なる。これらの山塊の南麓、三田市側には東から大船山(653.1m)、羽束山(500.5m)、千丈寺山(589.6m)、奥山(580m)、海見山(519.0m)、虚空蔵山(592.0m)などの小山塊が展開し、これらの間には、狭隘な谷底平野が形成されている。これらの谷底平野部には黒川、青野川、相野川、内神川などの小河川や、三田市の北西部にある海見山と虚空蔵山の間には大型河川である武庫川が南流している。武庫川は三田市北西部で流れを東に転じ、300m～400m級の天神岳、茗荷谷山、黒谷山、穴口山の四山からなる独立した山塊の周囲を巡るように流れ、天神岳のふもと三田市上本庄付近で再び南下を開始する。こうした武庫川および武庫川支流の小河川は、山塊を分断するように流れ、三田市街地の中央を貫流し、河川周辺に谷底平野を形成している。遺跡のある東本庄地区は、三田市北西部の天神岳、茗荷谷山、黒谷山、穴口山の四山で構成された独立山塊の南側になり、武庫川の蛇行現象によって生じた起伏に富んだ段丘が発達している。これらの起伏のある斜面上は、現在水田地帯となっている。遺跡の東側は武庫川がほぼ南北方向に流れ、西側は東に開口する谷と緩斜面が展開する。田中一の坪遺跡は、黒谷山の南麓の北東方向に延びる緩斜面先端部に位置する。

2．遺跡の層序

遺跡周辺の地形は、北から南にかけて緩やかに高度を減じる。掲載した調査区北壁の土層図は、この地形を横断したかたちになる。遺跡の基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　耕作土・床土

第Ⅱ層　淡黄色～灰色シルト質細砂（第3～7層に細分）

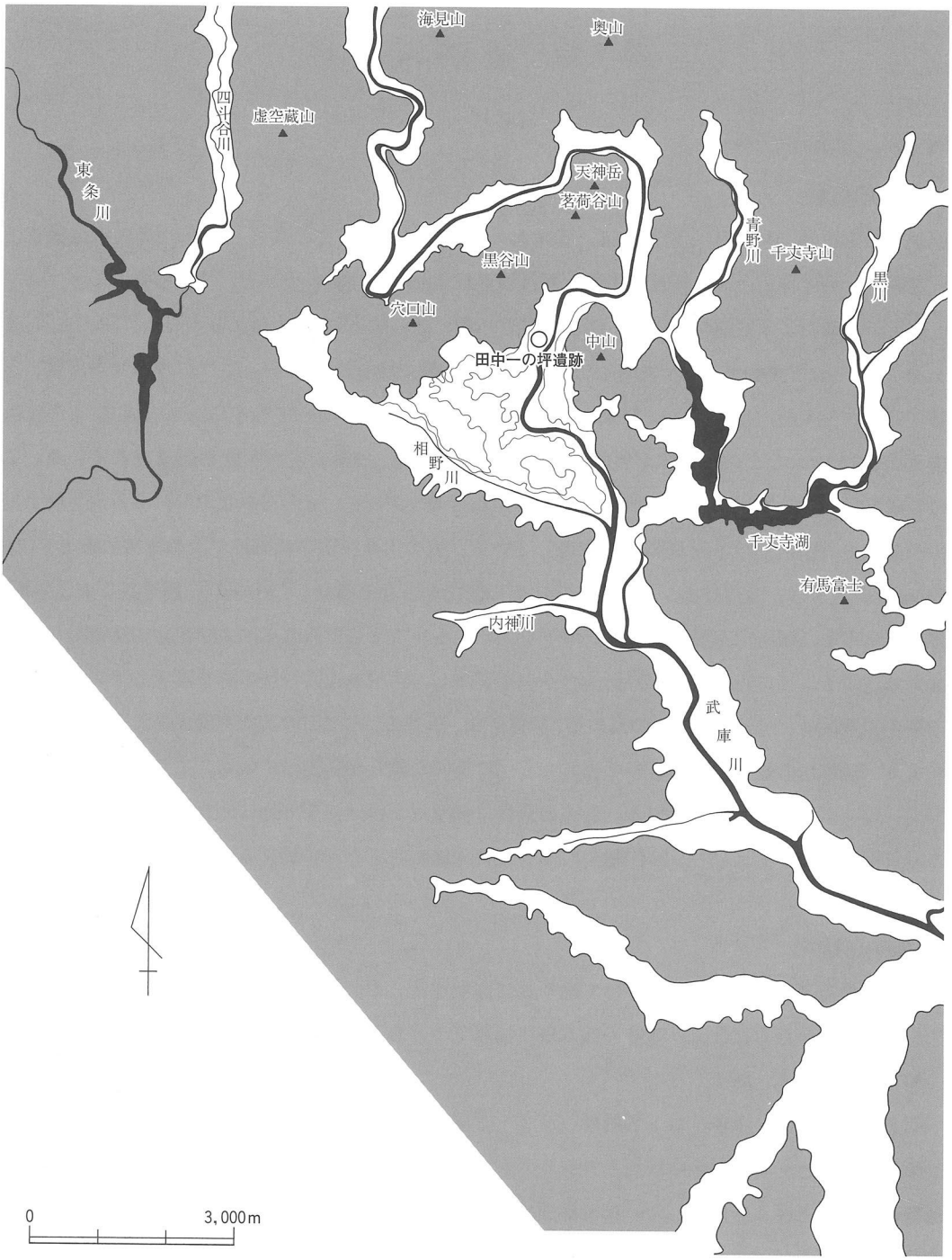
第Ⅲ層　灰色～暗茶褐色中砂混じりシルト

遺構は第Ⅲ層上面より確認した。第Ⅲ層面は調査区の東端部の№0から西側の№10付近までは、162.8m前後の標高値でほぼ水平な面を形成するが、№10より東側は標高163mを超え、30cm程度高くなっている。第Ⅲ層より上に堆積する第Ⅱ層は、古墳時代末から中世遺物の包含層である。5層に分層することができたが、各層が各時期の遺物を含むわけではなく、すべての層から古墳時代末から中世の遺物が出土している。第Ⅱ層は、調査区の東側、№0～3間では後世の水田化により層厚が20cm前後と薄く、№3以西では40cm～60cmの厚さで堆積し、西にいくに従い厚く堆積する傾向が認められる。

以上が調査区内の土層堆積状況である。

第2節　歴史的環境

今回の調査地の近隣においては従来考古学的調査の手の及んでいない地域で、昭和60年代の圃場整備事業による事前の分布調査・確認調査により、漸く多くの遺跡の存在が知れてきたところである。当地



第２図　遺跡周辺の地形

域でそれまで知られていたのは、外観により確認のできる古墳、あるいは地元に残る伝承による山城・館跡と称されるものであった。

この地域おける遺跡の分布数は多くない。旧石器時代の遺跡は、三田市内では３ケ所で発見されている。その内の１ケ所は当遺跡に南接する地域にあたる溝口遺跡である。

次の縄文時代の遺跡は、井ノ草・森田遺跡において後期の土器を包含する土坑が発見されている。

弥生時代の遺跡は、田中五ノ坪遺跡で中期（Ⅲ様式）の土器を包含する土坑が発見されている。当地域で発見されている弥生時代の遺構としては唯一のものである。他に西安・中筋遺跡において後期の甕が１個発見されている。

古墳時代になると、谷地形の中央部を貫流する武庫川を挟む両側の山麓地の傾斜変換地を中心として古墳が築かれるようになる。いずれの古墳も横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳である。現在確認できる墳丘はいずれも径10数メートルの規模である。その分布状況は単独、もしくは数基単位のありかたを特徴とする。古墳の数は古くに開墾等による削平で消滅している可能性もあるが、大きくは違わないと考えられる。また前期あるいは中期の古墳は発見されていない。この中で発掘調査が行われているのは東家地古墳と茗荷谷３号墳の２基である。東家地古墳は遺存状況が悪く、墳丘は径15m、石室は玄室幅1.5～1.7m・長さ5.2mの左片袖である。羨道長さは4.2m・幅1.3～1.5mある。石室の残りも悪く、基底石ないしは２段目までの石積がみられた。玄室奥には２基分の棺台石が残されていた。出土品は須恵器をはじめとして、ガラス小玉等の玉類・耳環・鉄製馬具他であった。石室の使用は６世紀後半から７世紀初頭までと考えられている。茗荷谷３号墳は墳丘径10m・石室は玄室幅２m・長さ3.6m・高さ2.1～2.2mの左片袖である。羨道長さは3.2m・幅１m・高さ1.2mである。玄室・羨道ともに天井石が残存している。羨道には閉塞石の一部も残存していた。石室内の出土品は須恵器のみである。この古墳の最大の特徴は、墳丘における外護列石と称されている施設である。ここでは石室主軸方向にたいして約45°で、玄室の左後方に６mの長さで残存している。石は高さが約１mの高さに積まれており、石垣状を呈している。同様の遺構は県下各地にて発見されているが、その機能については明確ではない。当古墳の列石に最も形態的に似通っているのは箕谷３号墳のものと考えられる。次にこの時代の集落遺跡については未だ発見されていないが、東向・藤ノ木遺跡では幅2.5m・深さ1.6mの横断面Ｖ字形の集落を取り囲む環濠の一部が発見されている。

奈良から平安時代の遺跡は東本庄地域において、いまだ発見されていない。平安時代末期になると田中五ノ坪遺跡において井戸を始めとする遺構群が発見されている。鎌倉時代から室町時代については、東向・地蔵家地遺跡の竪穴住居跡群を始め集落遺跡は急激に増加する。遺跡の多くは武庫川両岸の段丘上の水田地帯から発見されている。このような中世集落遺跡の増加の要因は、荘園と関連すると考えられる。このことは、当遺跡の所在地名である東本庄を始めとして、一帯に荘園由来の地名が多く見られることからも推測される。当地は平安時代末期から南北時代にかけての、後宇多院あるいは醍醐寺仏名院領であった「野鞍荘」の地に比定されている。文献史料にもこの時期から野鞍荘の記事が散見されるようになる。上記の遺跡の増加もこれに符合しているものと考えられる。また建武３年（1336年）の史料によれば、播磨守護赤松氏の被官人武田某による荘園の押領とそれに対する訴訟の記事が見られる。これはこの時代に多発する、院領の崩壊過程の一事例として捉えられている。

最後に周辺の丘陵頂部を始めとして現集落の中にも存在する山城、あるいは居館跡とされる遺構が相当数存在する。その大多数は断片的な史料・伝承等によれば15世紀代の遺構と推測され、その築造時期を含め実態については不明な点が多い。

参 考 文 献）

三田市教育委員会　『三田市遺跡分布地図』兵庫県三田市文化財調査報告第６冊　平成元年３月31日
三田市教育委員会　『本庄土地区画整理改良区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録　'87～'92』
兵庫県三田市文化財調査報告第８冊　平成４年３月31日
三田市教育委員会　『東家地古墳･茗荷谷古墳群３号墳』兵庫県三田市文化財調査報告第９冊　平成７年３月31日
三　田　市　『三田市史　第三巻古代・中世史料』平成12年12月15日
石田　善人　「荘園史の研究４」『兵庫史学第27号』兵庫史学会　昭和36年９月20日

第３章　遺　　構

第１節　遺構の概要

遺構は、掘立柱建物跡（SB）９棟、竪穴式住居跡（SB）２軒、土坑（SK）４基、溝（SD）５条がある。このほか、建物跡に伴うと考えられる柱穴群を検出したが、建物として識別できなかった。

掘立柱建物跡は、その多くが調査区外まで延びており、建物の全容を明らかにすることはできなかった。これは、調査区が幅5.5m～９mと狭小であることに起因している。

建物跡に関連する柱穴は、162個検出した。このうち建物跡として識別できたのは、SB01～SB04･SB07～SB11の９棟であった。

掘立柱建物は、桁方向を東に振る一群（SB02・SB11)、多少西に振る（N６°～30°W）一群（SB01・SB03・SB04・SB10）と大きく西に振る（N60°～79°W）一群（SB07・SB08・SB09）に大別できる。また多少西に振る一群のなかでもSB04はN６°Wとほぼ南北方向に近い桁方位をもち、この群のなかでさらに細分化できる可能性がある。

調査区内で検出した建物跡はいずれも建物の一部であることから、建物の規模は明らかではないが、SB02･SB11を除く掘立柱建物跡は、２間×３間程度（３～４m×3.5m以上）と比較的小型である。また、これらの建物を構成する柱穴は、径50cm～60cmの円形ないしは楕円形の大型の掘方で、検出面から30cm程度掘込んだ柱穴が多い。識別できた柱痕は、径20cm前後である。

建物跡に伴う柱穴から出土した遺物は、極めて少量で、建物の時期を確定する資料に乏しい。

SB07より出土した須恵器杯、間接的ではあるがSB02に附属すると理解している溝から出土した中世段階の土器が建物跡群の時期を探る手がかりとなる。

竪穴住居跡のうち１軒（SB05）は、建物が調査区内におさまり全容が明らかにすることができたが、もう１基（SB06）は、調査区外に遺構が延びており、住居跡の東半部のみ調査することができた。

竪穴住居跡はいずれも隅丸長方形の小型の住居跡で、いずれも無柱である。SB05は壁下に周溝が巡るが、SB06は周溝をもたず、北辺に幅40cmの狭いベット状遺構をもつなど、両者の構造は異なる。

遺物は、SB05の中央部より須恵器高杯が出土している。またSB06からも須恵器杯片が出土している。

土坑は、調査区の南西側で４基（SK04・SK05・SK06・SK07）検出した。これ以外に、調査区の北東側においても土坑状の落ち込みを確認したが、遺物の出土あるいは人為的な痕跡を見いだすことはなく報告からは除外した。

SK06は東壁の一部をSD01に切られている平面長方形の土坑である。土坑内には炭層が認められるほか、壁面が被熱した痕跡が認められるなど、その機能は明らかではないが、土坑内での火の使用が想定される。

SK04・SK05は須恵器杯が出土している小型の土坑である。土器はいずれも完形に近く、底面より出土している。

SK07からは土師器壺が出土している。一部を暗渠で破壊され、遺存状況の悪い楕円形の土坑である。

溝は、調査区の北東側で３条（SD01・SD02・SD04)、南西側で２条（SD05・SD06）の計５条検出した。これ以外に、近現代の暗渠等の溝があるが今回の報告からは除外している。

これらの溝のうち、SD01とSD02、SD05とSD06は一定の間隔をおいて並行しており、両者の溝は、

それぞれ一対で機能していたとも考えられる。しかし、SD01は掘立柱建物SB02の西側柱列と１m前後の間隔をおいて並行しており、あるいは、同建物跡の雨落溝として機能した可能性がある。遺物は、SD01とSD06より中世段階の土器が出土している。

第２節　掘立柱建物

SB01

№１～２間にあり、建物の北側は調査区外に延びているため全容は明らかではないが、２間以上（2.30m以上）×２間（3.20m）の南北棟建物である。桁方向は、N24°Wである。柱間寸法は梁行1.54m・1.66m、桁行1.08・1.30mである。掘立柱の掘方は円形で、径56cm～70cm、深さ28cm～40cmである。柱痕の大きさは、径20cm～28cmである。出土遺物はない。

SB02

№０～２間にあり、建物の東側部は調査区外に延びているため全容は明らかではない。柱の位置、柱間寸法から判断して南北棟の総柱建物と考えている。建物の規模は２間以上（4.60m以上）×１間以上（2.42m以上）で、桁方向はN10°Eである。柱間寸法は梁行2.42m、桁行2.08m～2.52mである。掘立柱の掘方は円形で、径40cm前後、深さ24cm～44cmと小型である。柱痕の大きさは、径10cm～20cmである。西側桁柱のＰ５内には焼石が投げ込まれていた。出土遺物は、Ｐ３柱穴内より完形の土師器皿（１）が出土している。

SB03

№３～４間にあり、建物の北側は調査区外に延びているため全容は明らかではない。２間以上（2.20m以上）×２間（2.52m）の南北棟建物と考えている。桁方向はN24°Wである。柱間寸法は梁行1.14m～1.38m、桁行1.02m～1.20mである。掘立柱の掘方は円形で、径42cm～52cm、深さ28cm～44cmである。柱痕の大きさは、径20cm前後である。出土遺物はない。

SB04

№４～５間にある。建物の南東部分の隅柱は調査区外の及んではいるものの、建物の全容は、ほぼ明らかである。３間（3.20m）×２間（2.63m）の南北棟建物である。桁方向はN60°Wである。柱間寸法は、梁行1.38m・1.25m、桁行1.0m～1.2mである。掘立柱の掘方は円形で、径34cm～65cm、深さ23cm～34cmである。柱痕は、17cm～20cmである。

出土遺物はない。

SB07

№２～３間にあり、建物の大半が調査区外にある。建物の北東隅部分を検出したのみで全容は明らかではないが、１間以上（1.70m以上）×１間以上（1.2m以上）の東西棟建物と理解している。建物を構成する掘立柱のうち、Ｐ22はSD04に切られている。桁方向は、N79°Wである。掘立柱の掘方は円形で、径40cm～80cm、深さ23cm～37cmである。柱痕の大きさは、径20cm前後である。

出土遺物はない。

SB08

№６～７間にあり、SB09と同様、棟軸方位を東西方向にもつ建物である。建物の東側は調査区外に及んでいるため、全容は明らかではないが、２間以上（3.32m以上）×２間（4.35m）の規模である。桁方向はN65°Wである。柱間寸法は、梁行2.15m・2.20m、桁行1.35m～1.67mである。掘立柱の掘方は、

円形ないしは楕円形で長さは55cm～72cm、深さ26cm～38cmである。

出土遺物はない。

SB09

№4～5間にある棟軸を東西方向にもつ建物である。建物の西端は調査区外におよび、全容は明らかではない。2間以上（2.90m以上）×2間（3.05m）の規模である。桁方向はN60°Wである。柱間寸法は、梁行1.45m・1.60m、桁行0.95m～1.43mである。掘立柱の掘方は円形で、径34cm～48cm、深さ23cm～33cmである。柱痕は、径14cm～18cmである。

出土遺物はない。

SB10

№17～18間にある。建物の北東部分の柱穴を4基確認したのみで、建物の大部分は西側調査区外に及んでいる。規模などは明らかにすることはできなかった。桁方向を南北方向とした場合、N30°Wである。確認できた柱間は、南北方向1.78m、東西方向1.88m～2.02mである。掘立柱の掘方は、円形ないしは隅丸方形で長さは47cm前後である。深さは20cm～26cmである。確認できた柱痕は径20cm前後である。

出土遺物はない。

SB11

№18～19にある。4基の柱穴が北東方向に同一線上に並んで位置するため、3間（4.6m）ないしはそれ以上の掘立柱建物と判断した。方向はN30°Eである。柱間寸法は1.25m～1.55mである。掘立柱の掘方は円形ないしは楕円形で、長さ40cm前後、深さ10cm～24cmである。確認できた柱痕は、15cm前後である。

出土遺物はない。

第3節　竪穴住居

SB05

№5～6間にある隅丸方形の住居跡である。住居跡の規模は長辺4.3m、短辺3.3mで、壁高は5cm～15cm遺存していた。壁直下には幅15cm～20cm、深さ4cm前後の周溝が巡っている。柱穴はなく、無柱の住居跡である。

遺物は、住居跡内中央付近の床面直上より須恵器杯（2・3）が出土している。

SB06

№8～9間にある。住居跡の西半は調査区外に及んでおり全容は明らかではないが、隅丸方形の住居跡である。住居跡の規模は短辺が3.1m、長辺2.6m以上である。東側の短辺には幅20cm～35cm、高さ4cm程度の狭小な平坦面が築かれている。壁高は4cm～5cm遺存している。

遺物は住居跡内南西部、床面直上より須恵器杯蓋（4）、高杯（5）、甕（6）が出土している。

第4節　土坑・溝

SK04

№3～4間にある。掘立柱建物ＳＢ03東側柱の柱穴に切られている。土坑は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。

土坑の規模は、長軸方向1.5m前後、短軸方向90cmである。土坑の底面はほぼ平坦で、南端でもう一

段掘削される。最深部の深さは20cmである。

遺物は南端の掘削部分より須恵器杯（7）、土師器甑の把手が出土している。

SK05

№8～9間にある。東西方向に主軸をもつ歪な楕円形の土坑である。

土坑の規模は、長軸方向1.05m、短軸方向63cm、深さ17cmである。

遺物は、土坑中央底面上より須恵器杯（8）、土師器高杯（9）が出土している。

SK06

№17～18間にある。北半が窄まった歪な長方形の土坑である。

土坑の規模は、短辺1.3m～95cm、長辺2.2mである。土坑の底面は北から南に向かって傾斜し、南端の最深部の深さは22cmである。

土坑の長軸方向は、ほぼ南北方向を指す。

土坑の底面には、2cm～5cmの厚さで炭と焼土が入り混じった層が堆積している。また南壁および東壁には被熱し赤化した痕跡が認められる。

出土遺物はない。

SK07

№15～16間にある。土坑の南西部分は暗渠で、北東端は撹乱により破壊を受け遺存状況は悪い。長軸方向1.7m以上、短軸方向1.15mの楕円形の土坑と思われる。深さは中央部で38cmである。

土坑底面より土師器甕（10）が出土している。

SD01・SD02

№0～1間にある。両溝は約4.5mの間隔をおいて平行して南北方向に並ぶ。SD01の東側は約1mの距離をおき、SB02が並ぶ。

SD01は幅25cm～40cm、深さ2cm～6cmで、溝底は北から南に向かって深くなる。

SD02は幅35cm～50cm、深さ8cm～33cmでSD01と同様、北～南に向かって深くなる。出土遺物はない。

SD04

№2～3の間にある。溝は東西方向に伸び、西端はSB07の柱穴を切る。溝の幅は50cm～1.5mと拡がり、東側が広くなる。深さは西端で6cm、東端で13cmである。遺物は、溝底より瓦器椀（11）が出土している。

SD05・SD06

№17～19間にある。両溝は約1.5mの間隔をおいて平行し南北方向に並ぶ。SD06の北東端は、SK06を切っている。またSD05の北東側はSB10の身舎内に及ぶ。

SD05は幅50cm～65cm、深さ5cm前後である。遺物は須恵器杯ないしは皿の破片（12）が出土している。

SD06は幅50cm～60cm、深さ6cm前後である。出土遺物はない。

第４章　遺　　物

第１節　古墳時代から飛鳥時代の遺物

土師器

高杯（９）・甕（10）が出土している。いずれも遺構内よりの出土である。高杯（９）はSK05、甕（10）はSK07よりの出土である。

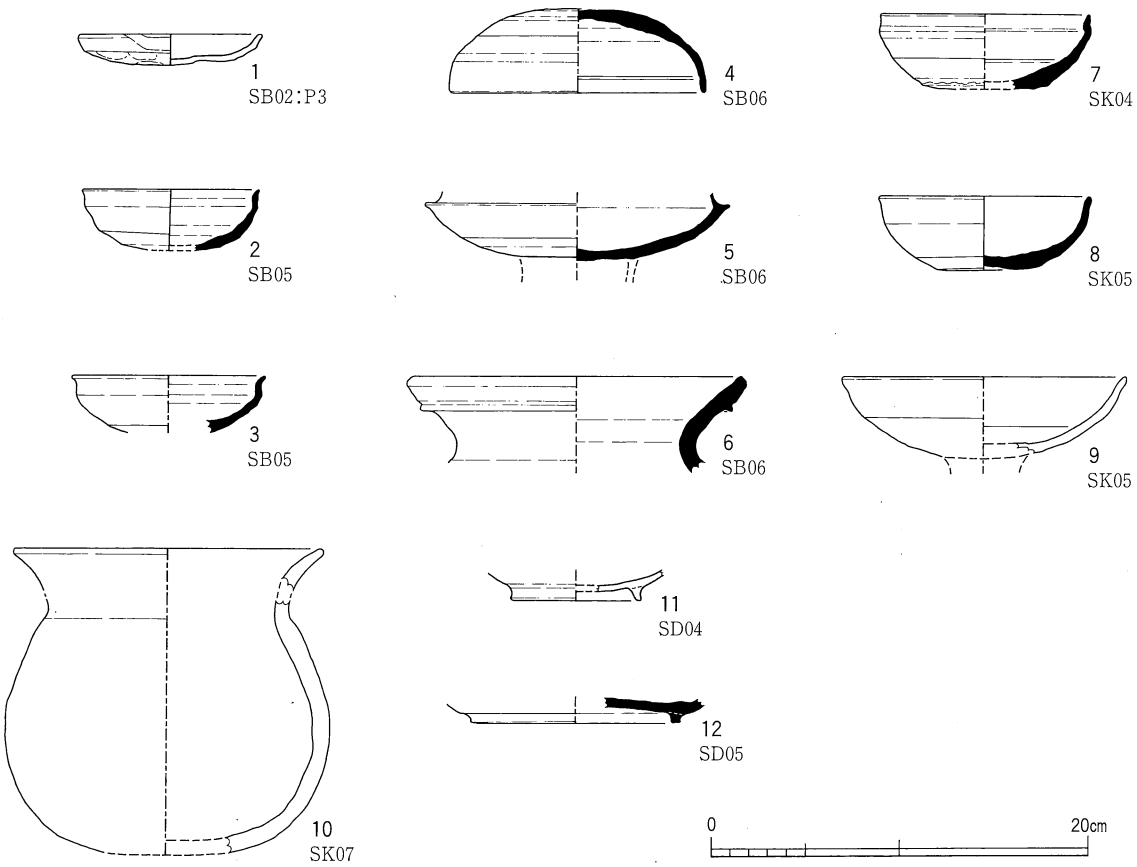
須恵器

蓋・杯・高杯・擂鉢・甕・壺が出土している。12はSD05、杯（２・３）は竪穴住居跡SB05、蓋（４）・高杯（５）・甕（６）は竪穴住居跡SB06より出土している。杯（７）はSK04、杯（８）はSK05よりそれぞれ出土している。

４・15は丸い頂部をもつ蓋で、頂部と口縁部の境に沈線がめぐり、その境が比較的明瞭な15と不明瞭な４がある。両者ともに口縁端部は丸くおさめている。陶邑編年のTK43～TK217型式に並行すると考えられる。13は口縁内面にかえりをもつ蓋である。TK217型式に並行すると考えられる。16・17は扁平な頂部をもち、下方に屈曲する縁部をもつ蓋である。

18は底部平底で器高も低い扁平な杯である。口縁の内傾度も強く、口縁端部に面をつくらず、丸くおさめている。TK209型式並行であろうか。

２・３、７・８、19・20は杯Ａである。丸底で口縁部が小さく外反する２・３・７と平底で大きく外反する８・19と平底化が顕著で口縁部が外傾する21の三群に大別できる。



第３図　遺構出土遺物

12・22～24は底部に高台をもつ杯Ｂである。いずれも底部あるいは口縁部の破片であるため全容は明らかではない。

５は高杯である。脚部と口縁端部が欠損し、遺存状況は悪い。TK209型式並行と考えられる。

25・26はすり鉢である。25の底部にはヘラ状工具による刺突痕がみられる。

27は小型の直口壺である。

出土した須恵器は、６世紀末から７世紀にかけての時期と考えられる。

第２節　中世・近世の遺物

平安時代後期から中世・近世にかけての遺物は、土師器皿・堝・羽釜、黒色土器、瓦器、須恵器椀・捏鉢、丹波焼鉢・甕、瀬戸・美濃焼卸皿・椀、肥前陶器椀がある。

遺構から出土したのはSD04出土の瓦器椀(11)のみで、その他は包含層Ⅱａ・ⅡＢ層からの出土である。

土師器・黒色土器・瓦器

31～33は、土師器小皿である。いずれも平底気味で口縁部が直線的に立ち上がる皿である。底部は指押えで外面口縁部はヨコナデが施される。

35は口縁部が「く」字形に外傾する土堝である。外面胴部には平行タタキ、内面にはナデ調整が認められる。

36は羽釜である。外面胴部は指押えの後縦位のナデ、内面は横位のナデが施される。内面には指頭圧痕が顕著に残る。

34は内黒で内外面に丁寧なヘラミガキが施された黒色土器と考えられる。破片のため全容は明らかではない。11は瓦器の底部である。摩滅が著しくミガキの痕跡を確認することはできない。

須恵器

須恵器は椀（37～41）と捏鉢（42～46）が出土している。

37～39は椀の底部である。37は突出した円盤状高台をもち、内面底部と体部の境に明瞭な段をもつ椀である。回転ヘラ切り手法による切り離し後、外面高台脇に丁寧なナデを施しているなど、38・39よりも古い様相をもつ。

38は37より退化した円盤状高台をもつ椀で、回転糸切りによる切り離し後、未調整の椀である。内面底部と体部の境に若干段差をもつ。39は平底の椀である。底部の切り離しは回転糸切り手法である。38が森田編年の第Ⅰ期、39は第Ⅱ期に相当すると考えられる。

42～46は東播系須恵器の捏鉢である。42・43は肥厚した口縁部をもち、端部を摘み上げた捏鉢である。44は口縁端部を若干上方へ摘み上げた捏鉢で、口縁部は肥厚していない。45・46は口縁部が内側に屈曲する捏鉢である。42・43は森田編年の第Ⅱ期第２段階、46が第Ⅱ期第１段階の範疇におさまると理解し、その時期を12世紀中葉～13世紀初頭頃と考えている。

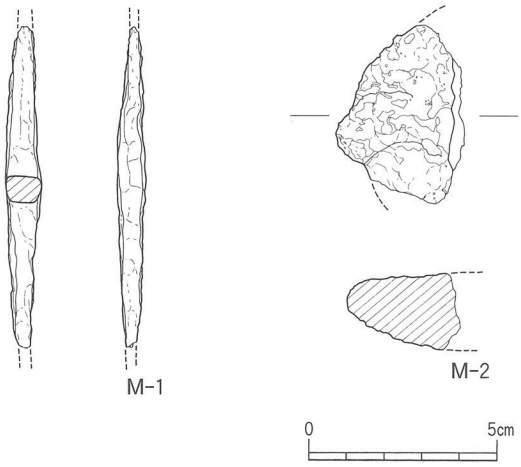
丹波焼

丹波焼は、擂鉢（47～55）・甕（56～60）・鉢（61）がある。

47～55は一回一条描きの卸目をもつ擂鉢である。いずれも口縁部あるいは底部のみの破片であるため全容は明らかではない。47はわずかに上方に摘み上げた口縁端部をもつ擂鉢で、外面には指押えの痕跡を明瞭に残す。内面の卸目は縦方向と斜め方向が交差する特徴をもっている。48・49は口縁部が肥厚し、端部をわずかに上方に摘み上げている。49は卸目の間隔が広く、外面の口縁部および体部にヨコナデを

施している。卸目の間隔について言及すると、間隔の広い50・52・54と間隔の狭い51・55がある。

56～60は甕である。口縁が外反し、端部に面をもつ56・57と、口縁部が「く」の字状に屈曲する58～60の二群に大別できる。後者の一群はいずれも内面に沈線を巡らせている。前者の一群のなかにも、57のように内面に沈線を巡らす甕もある。こうした甕の口縁の特徴は、源兵衛山窯・太郎三郎窯跡、稲荷山窯跡の表採資料のなかに類似したものを見ることができる。61・62は鉢と香炉である、近世の所産と考えられる。



第4図　金　属　器

瀬戸・美濃焼

63は卸皿の底部破片で、全容は明らかではない。64の平椀の釉色は、透明度の高い淡い緑色を呈している。高台の特徴から、14世紀代の所産と理解している。

65は肥前陶器の椀である。内面には暗緑色の透明度の低い釉が施されている。16世紀末から17世紀初頭頃の所産と考えている。

中国製磁器

66～68は龍泉窯系青磁碗である。66・67は外面に鎬蓮弁文を彫った青磁碗で、森田分類のＩ５ｂ類に収まると理解でき13世紀代の年代を考えている。

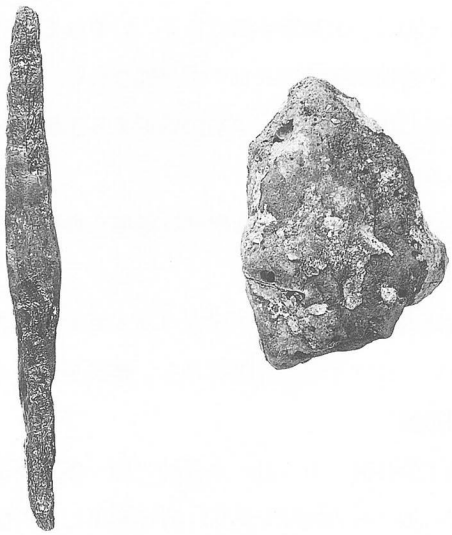


写真1　金　属　器

第3節　金　属　器

鉄製釘（Ｍ１）と椀形鉄滓（Ｍ２）である。いずれも包含層第Ⅱ層中より出土している。

Ｍ１は両端が尖った合釘である。全長8.5㎝以上、断面形は９×７㎜の四角形を呈している。重量は9.6ｇである。

Ｍ２は、小鍛冶段階で生じる椀形鉄滓である。表面は皺状を呈し、多孔質である。部分的に淡い緑色を呈する。平面形は不整な隅丸方形で、３方を鏨で打ち欠いている。重量は42.2ｇである。

参考文献）

田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981

中村　浩　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981

森田　稔　「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995

河野克人　「丹波焼古窯跡と採集遺物」『丹波焼　遺跡探査による埋蔵文化財調査報告書』今田町文化財調査報告第６集　今田町教育委員会　1999

藤澤良祐　「古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995

盛　峰雄　「陶器の編年　椀・皿」『九州近世陶磁学会10周年記念　九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会　2000

山本信夫　「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995

表1　出土土器観察表

口径：（　）は復元値、器高：（　）は残存高

	地　区	出土位置	器　種	器形	口径(cm)	器高(cm)	調　　整	色　調	残存率	備　考
1	№1～2	SB02：P3	土師器	皿	9.5	1.7	外面:底部指押え･口縁部ヨコナデ	7.5YR8/3	完形	
2	№3～4	SB05	須恵器	杯	9.2	(3.3)	外面:底部回転ヘラケズリ、内面:多方向ナデ	N7/	1/2	杯A
3	№3～4	SB05	須恵器	杯	(9.9)	(3.0)	底部回転ヘラケズリ	N7/	1/4	杯A
4	№4～5	SB06	須恵器	蓋	(13.2)	4.4	外面:頂部回転ヘラケズリ(右ロクロ)	2.5Y8/1	1/2	
5	№4～5	SB06	須恵器	高坏		(3.7)	外面:底部回転ヘラケズリ	2.5Y8/2	1/2	
6	№4～5	SB06	須恵器	甕	(17.2)	(5.1)	外面:口縁部凸帯	N7/	1/6	
7	№2～3	SK04	須恵器	杯	(10.9)	(4.0)	外面:底部ヘラ切り無調整	2.5Y8/1	1/4	杯A
8	№0～1	SK05	須恵器	杯	11.0	3.9	外面:ヘラ切り･頂部周辺回転ヘラケズリ	5Y8/1	3/4	杯A
9	№8～9	SK05	土師器	高坏	(14.8)	(4.2)	外面:体部ヘラケズリ、口縁ヨコナデ、 内面調整不明	10YR8/3	1/4	
10	№8～9	SK07	土師器	甕	(16.1)	(16.2)	外面:二次的被熱	2.5YR7/6	1/4	
11	№1～2	SD04	瓦　器	椀		(1.65)	摩滅のため調整不明	N4/	1/4	
12	№3～4	SD05	須恵器	杯or皿		(1.35)	外面:底部回転ヘラケズリ	N7/	1/8	杯B
13	№4～5	4層	須恵器	蓋		(2.9)		N8/	破片	杯A蓋
14	№1～2	包含層	須恵器	蓋		(1.8)		N8/	破片	杯B蓋
15	№3～4	4層	須恵器	蓋	(9.2)	4.2	外面:頂部ヘラ切り無調整 頂部周辺回転ヘラケズリ	10YR8/1	1/4	
16	№4～5	4層	須恵器	蓋		(1.5)	外面:頂部回転ヘラケズリ、内面:不定方向ナデ	N6/	破片	
17	№2～3	包含層	須恵器	蓋	(17.6)	(2.4)	外面:頂部回転ヘラケズリ、内面:多方向のナデ	N7/	1/8	杯B蓋
18	№7～8	包含層	須恵器	杯	(12.4)	4.0	外面:底部回転ヘラケズリ	N8/	1/9	
19	№5～6	包含層	須恵器	杯	11.0	3.4	外面:底部ヘラ切り後ナデ	N7/	1/2	杯A
20	№3～4	撹乱	須恵器	杯		(2.1)	外面:底部ヘラ切り無調整	2.5Y7/1	3/8	
21	№4～5	3層	須恵器	杯	(9.8)	(3.4)	外面:底部ヘラ切り無調整	5PB7/1	1/2	杯A
22	№4～5	3層	須恵器	杯		(4.7)		N7/	破片	杯B
23	№3～4	包含層	須恵器	杯		(1.3)	外面:底部回転ヘラケズリ	N5/	1/8	杯B
24	№2～3	包含層	須恵器	杯		(2.2)		N8/	1/8	
25	№3～4	4層	須恵器	すり鉢		(5.4)	外面:底部ヘラ切り無調整、自然釉付着	N7/	1/2	
26	№1～2	包含層	須恵器	すり鉢		(2.8)	外面:底部ヘラによる刺突	5PB6/1	1/4	
27	№8～10	4層	須恵器	壺	(8.2)	(4.7)	外面底部回転ヘラケズリ	N8/	1/8	小型直口壺
28	№3～4	3層	須恵器	甕		(4.5)	外面:凹線＋波状文	N6/	破片	
29	№1～2	包含層	須恵器	甕		(4.3)	外面:連続した刺突文	N7/	破片	
30	№3～4	4層	須恵器	不明	(12.2)	(2.6)	外面:底部ヘラ切り痕？･回転ナデ、 内面:不定方向ナデ	N6/	1/8	硯？
31	№4～5	4層	土師器	皿	(6.8)	(1.7)	摩滅のため調整不明(指押えか)	2.5Y8/1	1/8	
32	№3～4	4層	土師器	皿	7.7	1.8	外面:体部指押え、摩滅のため調整不明瞭	2.5Y8/1	1/4	
33	№1～2	包含層	土師器	皿	(8.2)	1.3	摩滅のため調整不明	5YR8/3	1/6	
34	№3～4	包含層	黒色土器	椀	(14.8)	(4.0)	内外面:ミガキ	10YR8/2	1/4	黒色土器A
35	№4～5	3層	土師器	堝		(7.0)	外面:横位タタキ、内面:ナデ･指頭圧痕	2.5YR6/4	破片	
36	№5～6	4層	土師器	釜		(8.0)	外面:胴部指押え、内面:ナデ	7.5YR8/3	破片	羽釜
37	№3～4	4層	須恵器	椀		(2.7)	外面:底部ヘラ切り無調整	N8/	1/2	
38	№5～6	4層	須恵器	椀		(2.2)	外面:底部回転糸切り	5Y7/1	1/2	
39	№2～3	包含層	須恵器	椀		(2.5)	外面:底部回転糸切り、内面:底部不定方向ナデ	5PB6/1	1/7	
40	№5～6	4層	須恵器	椀		(4.0)		N7/	1/5	
41	№5～6	4層	須恵器	椀	(15.8)	(5･0)		2.5Y7/1	1/6	
42	№3～4 ･5～6	3･4層	須恵器	鉢	(27.6)	11.9	外面:底部回転糸切り･体部指頭圧痕、 内面:体部指頭圧痕	5Y7/1	1/6	捏鉢
43	№2～3	包含層	須恵器	鉢	(29.8)	(3.1)		N6/	1/12	捏鉢
44	№2～3	包含層	須恵器	鉢	(20.8)	(5.5)		N7/	1/12	捏鉢
45	№0～1	包含層	須恵器	鉢		(3.1)	片口部付近	N7/	破片	捏鉢
46	№3～4	3層	須恵器	鉢		(5.8)	外面:指頭圧痕	5Y7/1	破片	捏鉢
47	№3～4	3層	丹　波	鉢		(4.9)	内面:卸目(1回1条描き)	5YR6/3	破片	擂鉢
48	№4～5	3層	丹　波	鉢		(3.9)	内面:自然釉付着	5YR5/1	破片	擂鉢
49	№3～4	3層	丹　波	鉢		(6.2)	内面:卸目(1回1条描き)	5YR8/4	破片	擂鉢
50	№4～5	4層	丹　波	鉢		(5.3)	内面:卸目(1回1条描き)	5YR5/4	破片	擂鉢
51	№4～5	4層	丹　波	鉢		(5.3)	外面:底部未調整	N8/	破片	擂鉢
52	№4～5	3層	丹　波	鉢		(6.3)	外面:体部ナデ･底部周縁ケズリ、 内面:卸目(1回1条描き)	2.5YR7/6	破片	擂鉢
53	不明	3層	丹　波	鉢		(4.3)	外面:底部周縁ヘラケズリ･体部指押え→ナデ 内面:卸目(1回1条描き)	5YR8/4	破片	擂鉢
54	№3～4	3層	丹　波	鉢		(6.4)	内面:卸目(1回1条描き)	5YR8/4	破片	擂鉢
55	№4～5	4層	丹　波	鉢		(5.3)	内面:卸目(1回1条描き)	7.5R5/2	破片	擂鉢
56	№3～4	包含層	丹　波	甕		(3.8)	内外面:自然釉	7.5Y6/2	破片	
57	№5～6	包含層	丹　波	甕		(4.5)	内面:口縁部沈線	2.5YR4/4	破片	
58	№3～4	3層	丹　波	甕		(5.8)	内面:口縁部沈線、内面:胴部ナデ	2.5YR7/3	破片	
59	№3～4	3層	丹　波	甕		(5.0)	外面:口縁部沈線	5YR5/4	破片	
60	№3～4	3層	丹　波	甕		(3.9)	内外面:口縁部沈線	2.5YR7/4	破片	
61	№3～4	3層	丹　波	鉢	(16.8)	6.2	外面:指押え痕、内面:ナデ	2.5YR7/4	1/8	
62	№0～1	包含層	陶　器	香炉		(2.0)	外面:底部回転糸切り	2.5Y7/1	1/4	
63	№3～4	3層	瀬戸･美濃	皿		(2.1)	外面:底部回転糸切り	10YR8/2	1/4	卸皿
64	№3～4	3層	瀬戸･美濃	椀		(1.7)	外面:高台内無釉	7.5Y7/3	1/2	
65	№4～5	4層	肥前(唐津)			(2.7)	外面:高台部無釉	2.5YR6/4	1/4	施釉陶器
66	№5～6	4層	青　磁	碗		(3.8)	外面:蓮弁文	10GY6/1	破片	中国製磁器
67	№3～4	4層	青　磁	碗		(5.0)	外面:鎬蓮弁文	2.5GY6/1	破片	中国製磁器
68	№0～1	包含層	青　磁	皿		(1.6)	外面:高台内全面施釉	5GY6/1	破片	中国製磁器

第5章　結　　語

今回の調査地においては、主に古墳時代後期から飛鳥時代の遺構群を発見することができた。遺構は小型の竪穴住居跡2棟と掘立柱建物跡・溝跡・土抗跡であった。SB02については出土品より中世の遺構である。どの遺構についても調査範囲が狭く限られていたため、その全容が判明するものはなかった。

竪穴住居跡2棟はともに棟内には柱穴がなく、規模も小さくその用途は居住用というよりも他の用途をも想定できるものであった。遺構は後世の削平のために遺存状況が悪く、遺構の構造等についての詳しい結果は得られなかった。

掘建柱建物跡群についても全体規模の判明するものはなかったが、建物の数は9棟が復元できた。他にも柱穴跡は存在しているが、棟として復元できなかった。これらの遺構の時期は竪穴住居跡と同時期と考えられる。

溝跡についての用途は判然としないが、SD01は中世段階の建物跡SB02の雨落ち溝と推定される。しかし、他の溝についての用途は不明である。

土坑については形態・規模ともに統一性はなく、出土品もほとんど無くその用途については不明である。その中でSK06については、遺構の性格が推測しうる状況が残っていた。それは平面形態が凸の字形であること、床面には炭・焼土が残り、壁の一部に被熱による赤化が認められたことである。この平面形態は、最近調査を行った氷上郡青垣町内の小鍛冶炉と類似している。これらの状況から、この土坑は小鍛冶炉ではないかと推測している。遺構の時期については決定材料が無かった。また、この遺構とは直接に結びつかないが、包含層よりは小鍛冶の操業時に生じる椀形鉄滓が出土している。

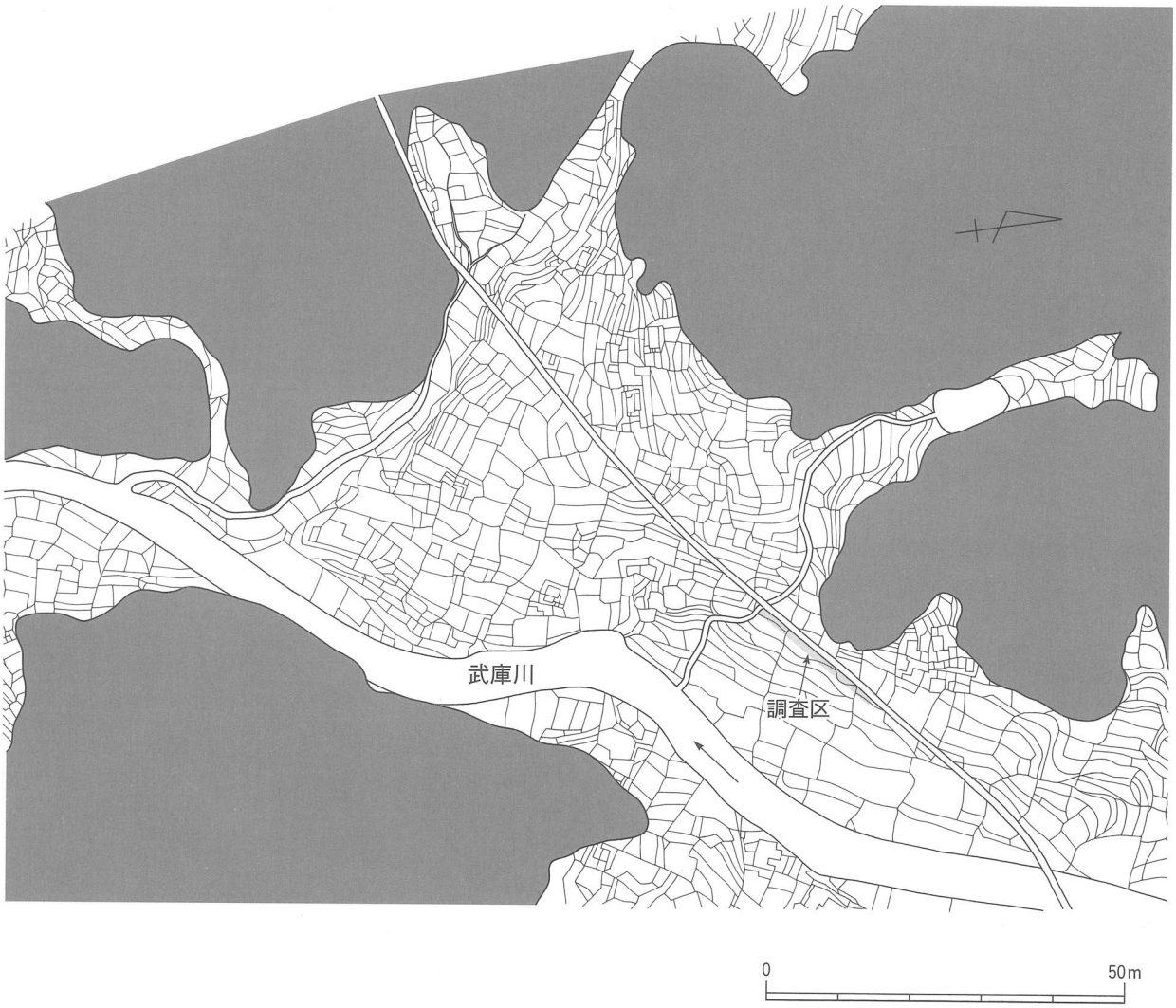
当地域は中央に武庫川の流れる狭隘な谷間にある。遺跡の多くは川の両岸の現水田地帯となっている河岸段丘上とその背後の丘陵に続く緩傾斜地上に位置している。現在残っている古墳は、丘陵斜面にかかる傾斜の変換地帯に立地している。しかし、この近年の水田基盤整備事業に伴う調査結果によると、現在は一面の水田となっている河岸段丘の平坦地にも古墳が存在していた証左が得られている。往時の古墳は現在の数よりさらに多かったものと考えられる。古墳時代後期の集落跡については、田中五ノ坪・東向藤ノ木・井ノ草森田遺跡において断片的に遺構等が発見されてその存在が確認されている。そのなかでも東向藤ノ木遺跡においては、幅2.5m・深さ1.6m・断面V字形の溝の一部が発見されており、集落の環壕の一部かと推定されている。このようにみると、この狭い谷地形の中に今回調査した田中一の坪遺跡を含め、数カ所の集落に点在していたと推定されるが、相互の関連性を含め各集落の全体像が明らかになった遺跡は現時点ではない。

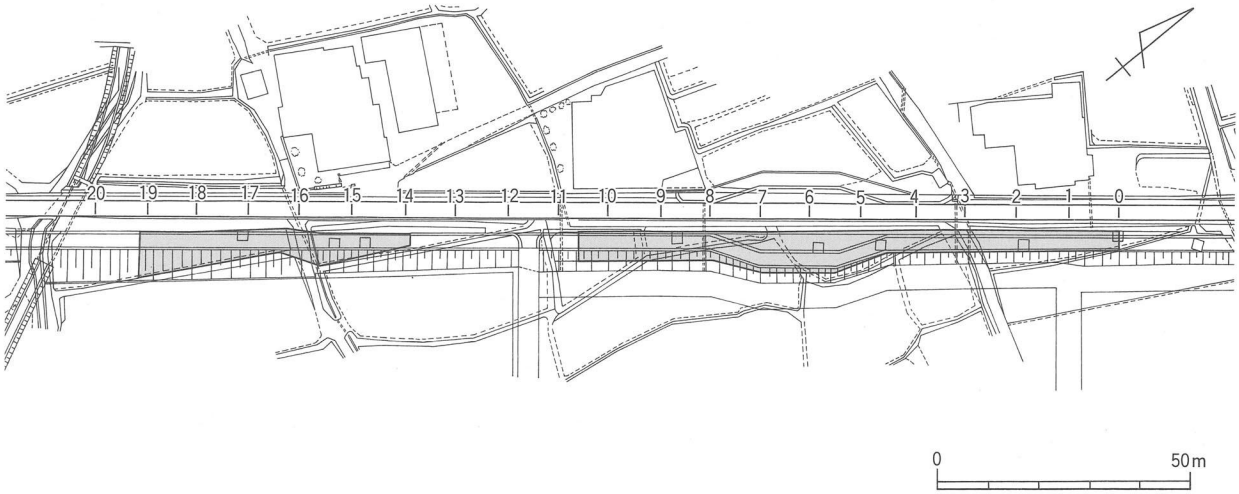
次に鎌倉から室町時代にかけた時期については、10ケ所を越える遺跡が確認されている。その所在は谷中央の武庫川の両岸のほぼ全域にわたっており、この谷一帯に集落が点在する状況となっている。西安中筋・井ノ草宮ノ谷の両遺跡では壕を巡らす館跡が確認されている。また、東向地蔵家地遺跡においても同時期の集落が発見されている。これらは荘館を含む荘園内の各種の建物跡と推定されている。

以上のように当地域には地名においても、また遺跡の面においても鎌倉から室町時代の荘園の景観・遺構を色濃く残している地域であることが改めて確認できた。

遺跡の位置

図版 1





図版 2

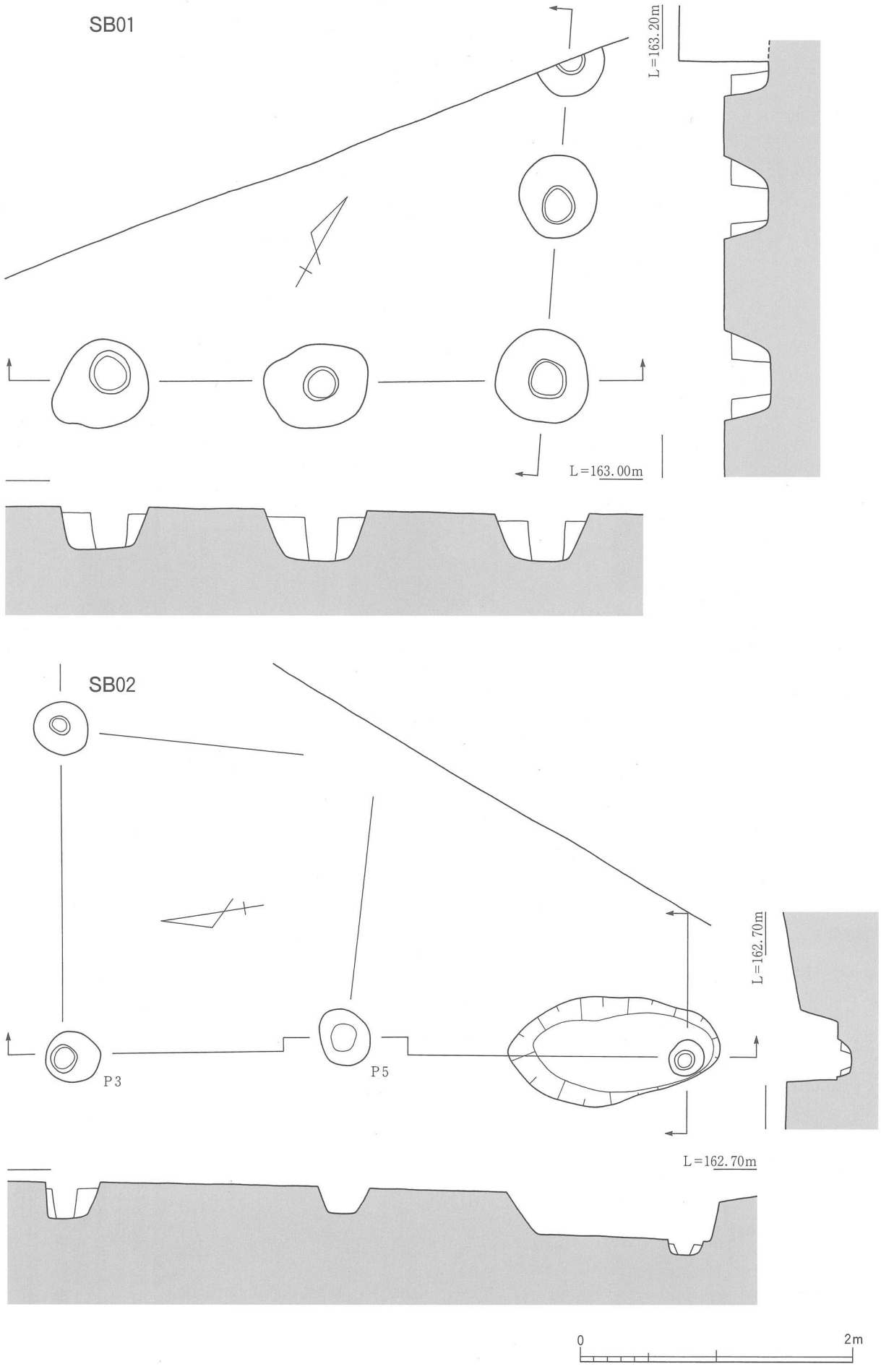
遺跡全体図

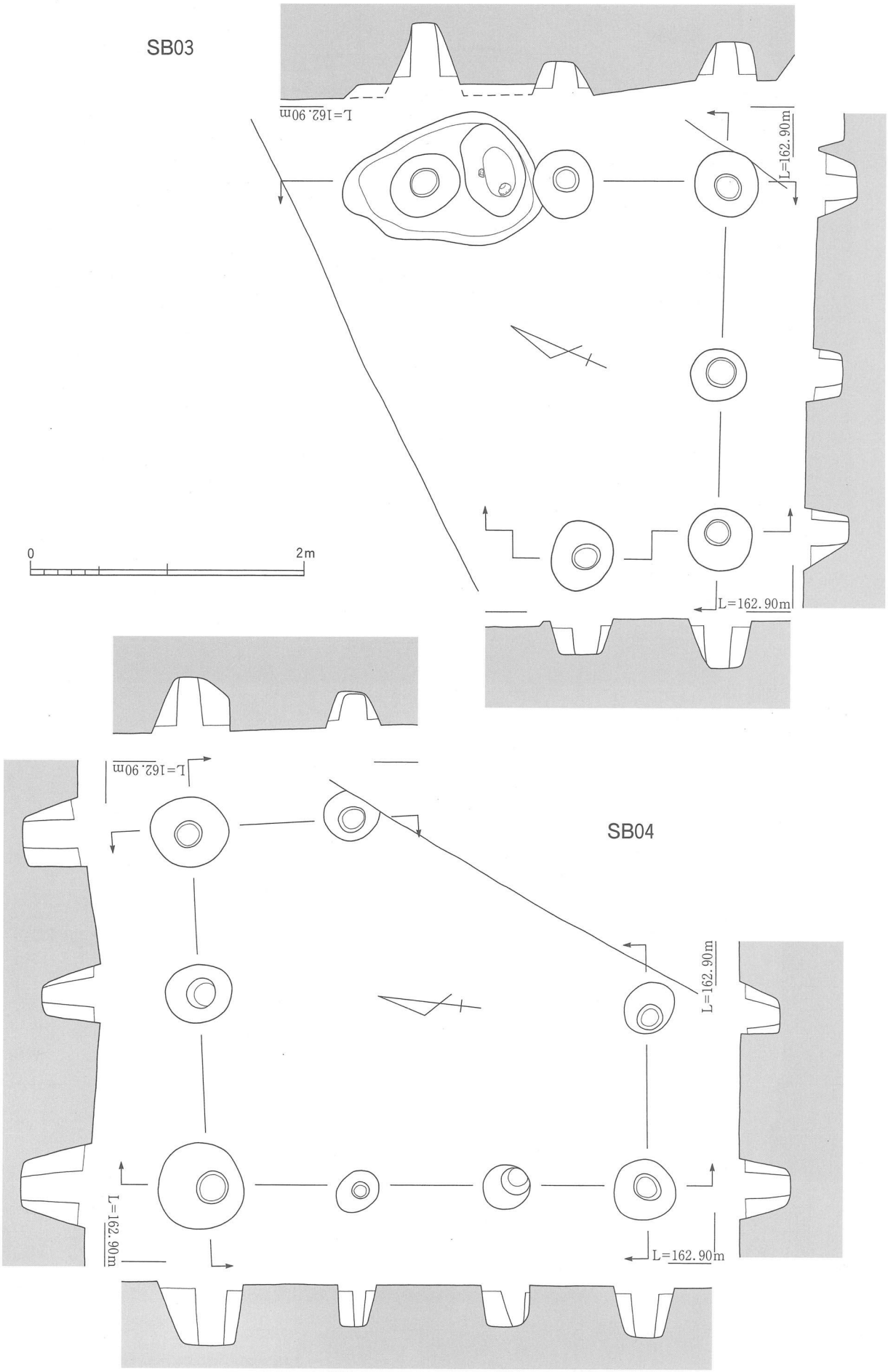
SB01
SB02
SD01
SD02
SD03
SD04
SB07
P18
SK04
SB03
SB09
SB04
SB05
SB08
SB06
SK05
SK07
SK06
SD06
SB10
SD05
SB11
20m

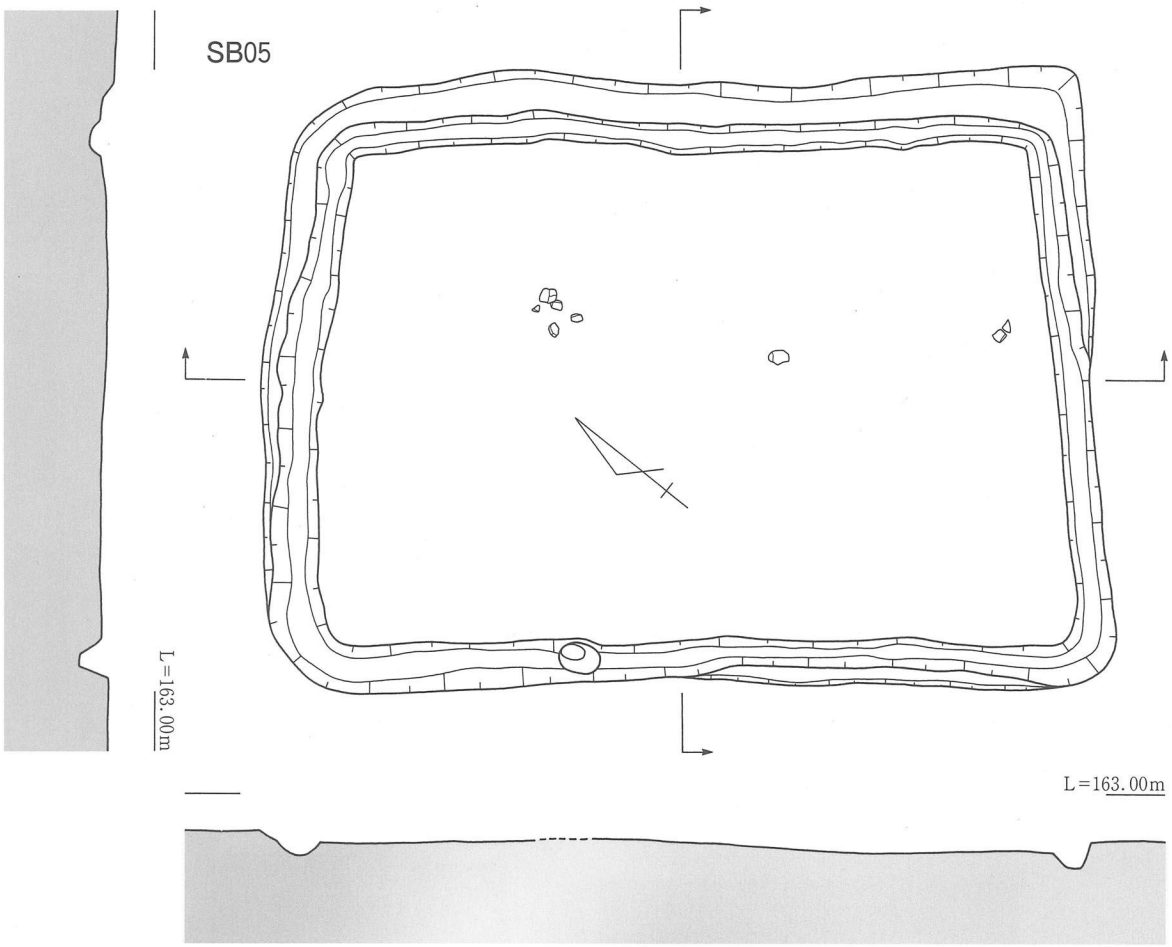
土層断面図

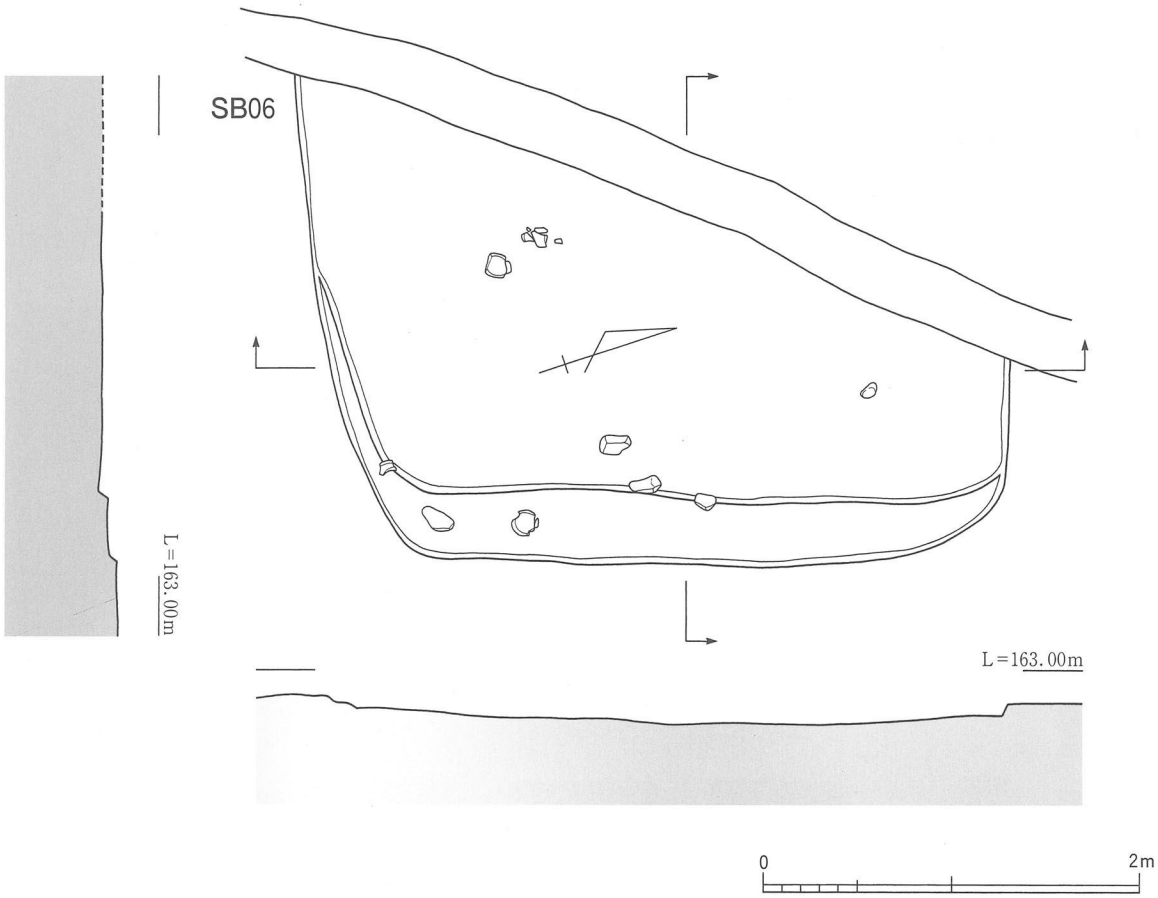
図版 3

L=164.00m
L=163.00m
1．耕　土
2．床　土
3．黄褐色粗砂シルト（黄色地山含）
4．灰白色粗砂シルト
5．灰白色粗砂シルト＋黄色ブロック
6．黄褐色シルト中２～３cmの礫混り
（遺物包含層）
7．淡灰色砂質シルト
灰色～暗茶褐色中砂混りシルト（遺構検出面）
2m
20m

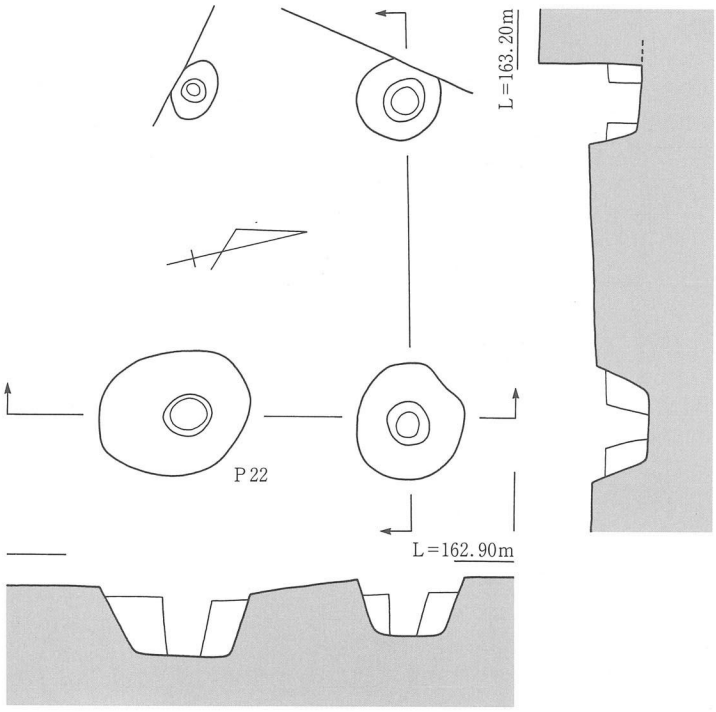

SB01
L=163.20m
L=163.00m
SB02
P3
P5
L=162.70m
L=162.70m
0
2m

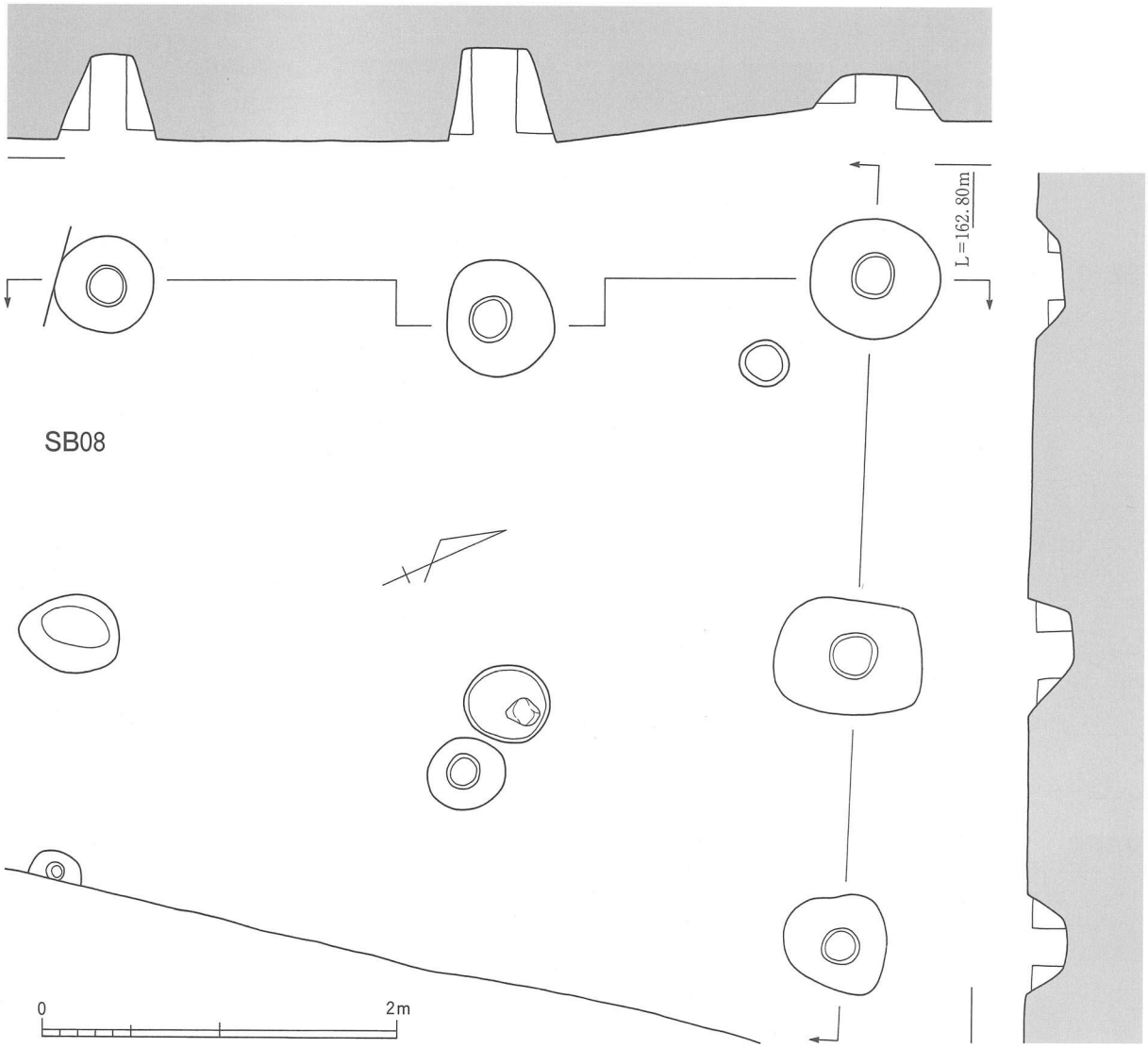

SB03
L=162.90m
L=162.90m
L=162.90m
0
2m
SB04
L=162.90m
L=162.90m
L=162.90m
L=162.90m


SB05
L=163.00m
L=163.00m

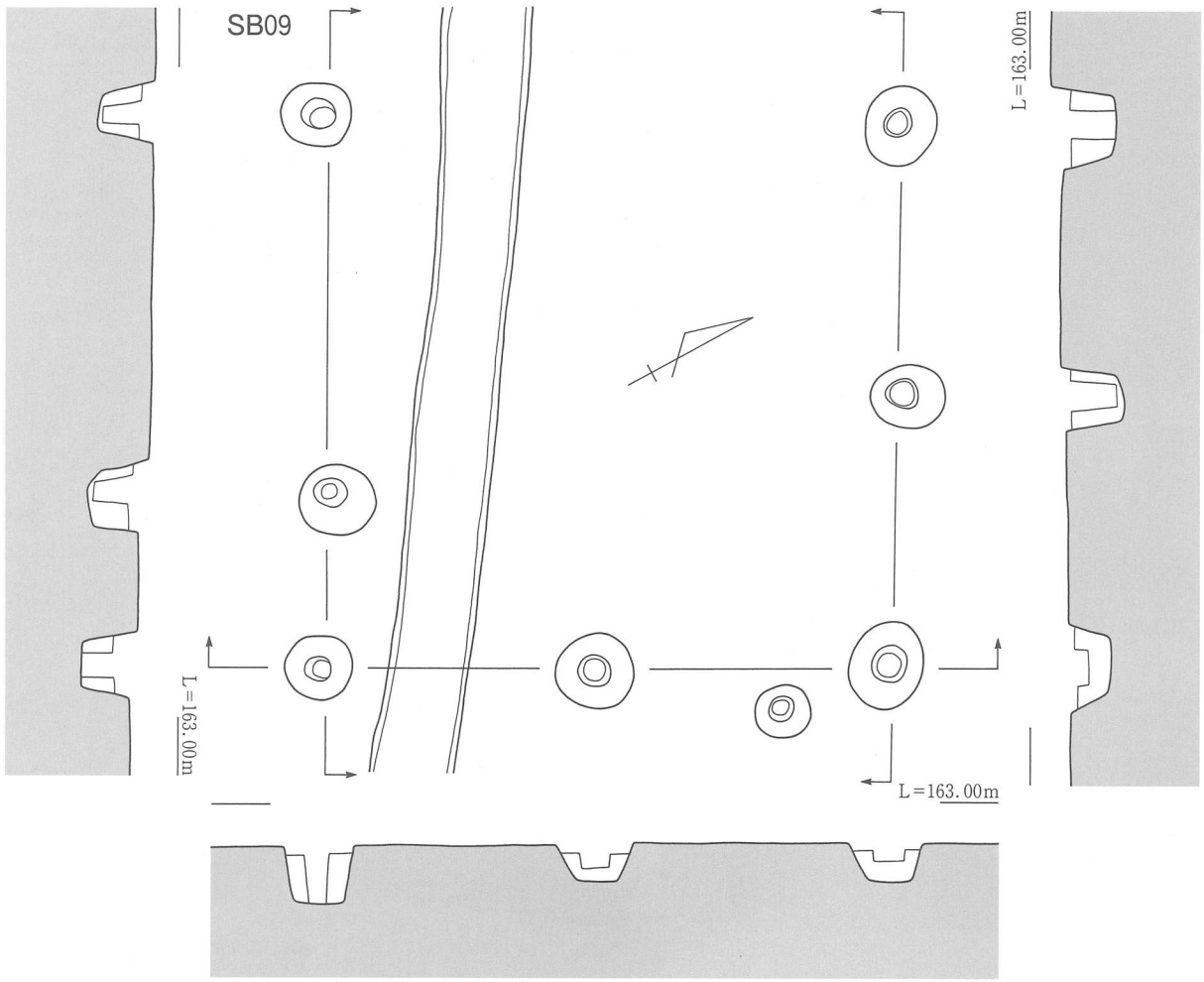

SB06
L=163.00m
L=163.00m
0
2m

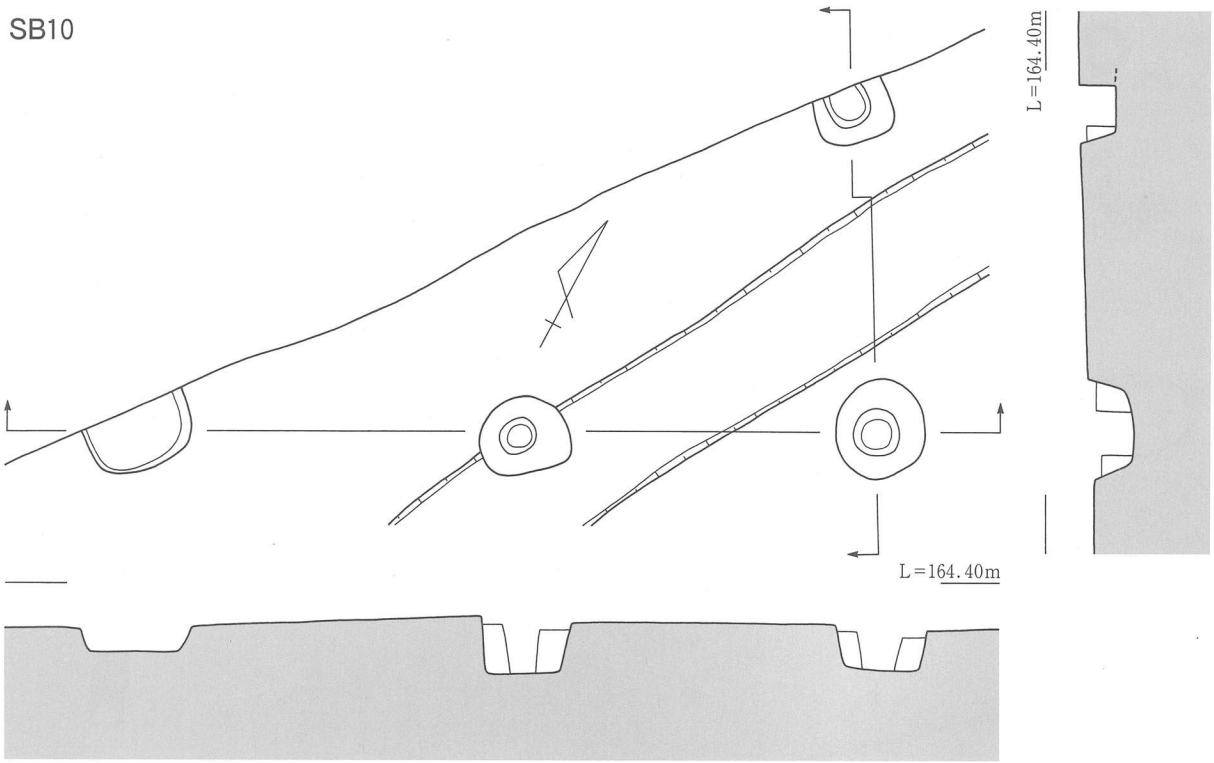
SB07



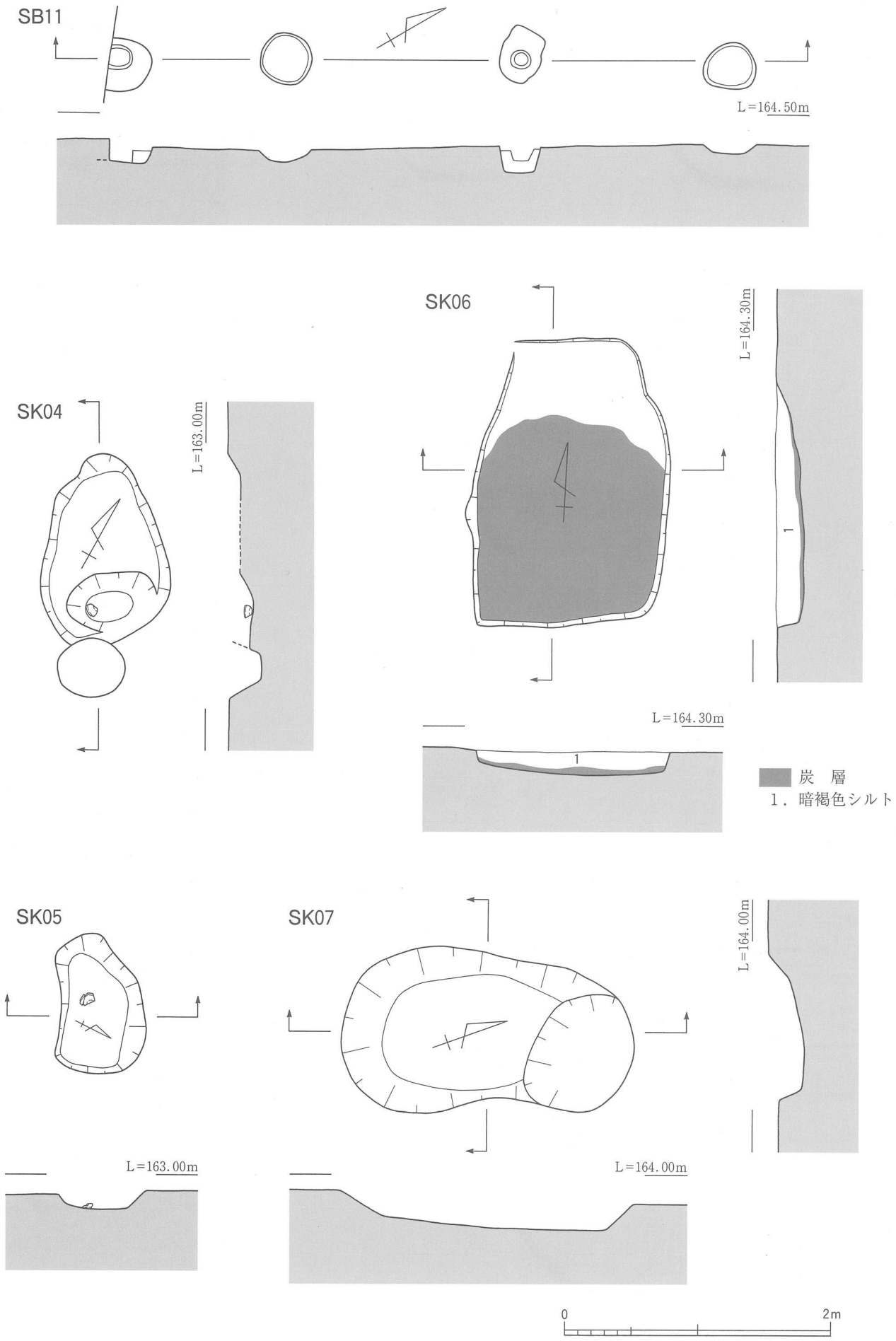


SB08

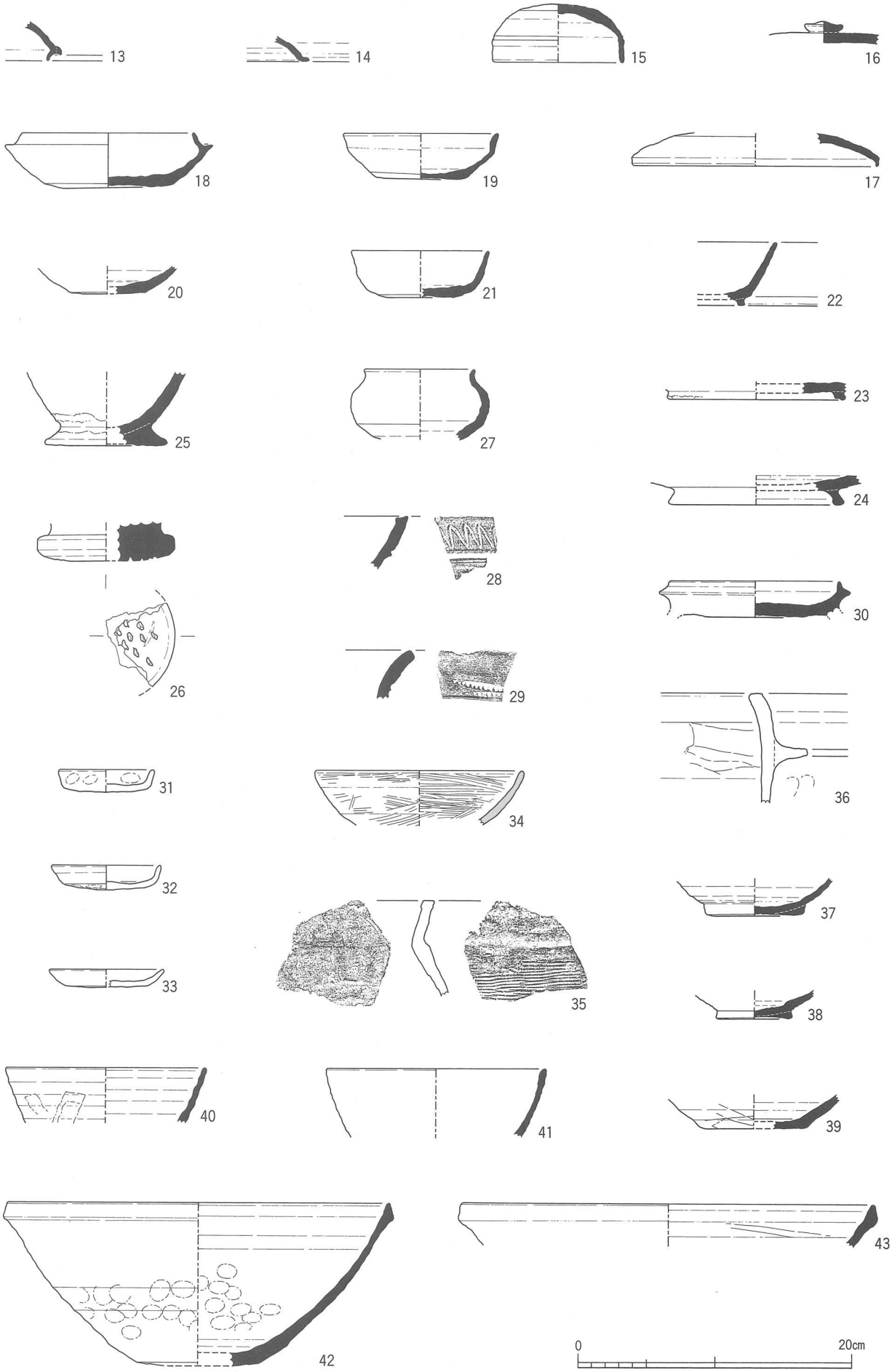

SB09
L=163.00m
L=163.00m
L=163.00m

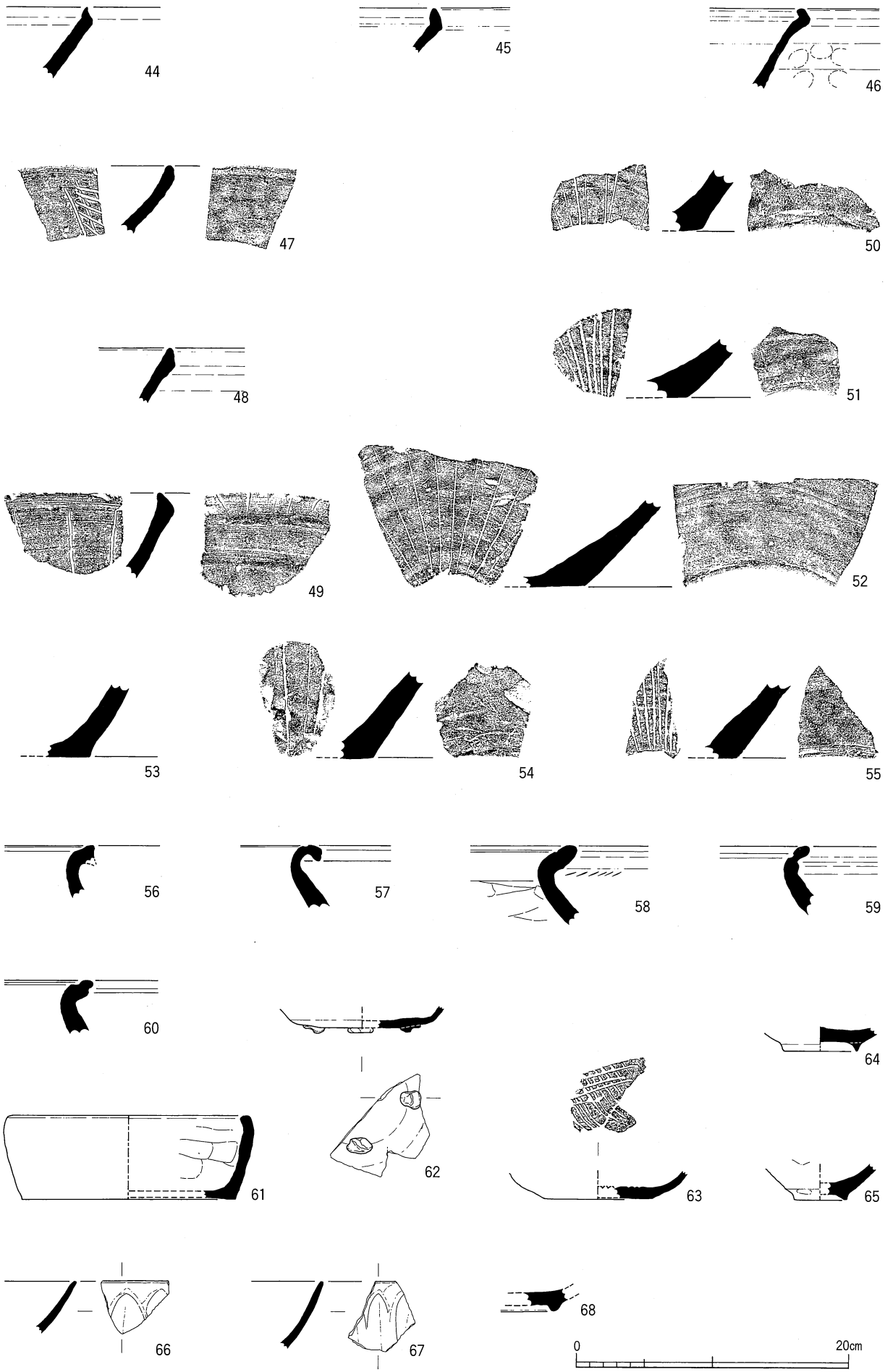

SB10
L=164.40m
L=164.40m

0
2m


SB11
L=164.50m
SK06
L=164.30m
1
L=164.30m
1
SK04
L=163.00m
炭　層
1．暗褐色シルト
SK05
L=163.00m
SK07
L=164.00m
L=164.00m
0
2m

包含層出土遺物（1）


13
14
15
16
18
19
17
20
21
22
25
27
23
24
28
30
26
29
31
34
36
32
37
33
35
38
40
41
39
42
43
0
20cm


44
45
46
47
50
48
51
49
52
53
54
55
56
57
58
59
60
64
61
62
63
65
66
67
68
0
20cm

田中一の坪遺跡遠景（南東から）

調査区全景（北東から）
（№1～11間）

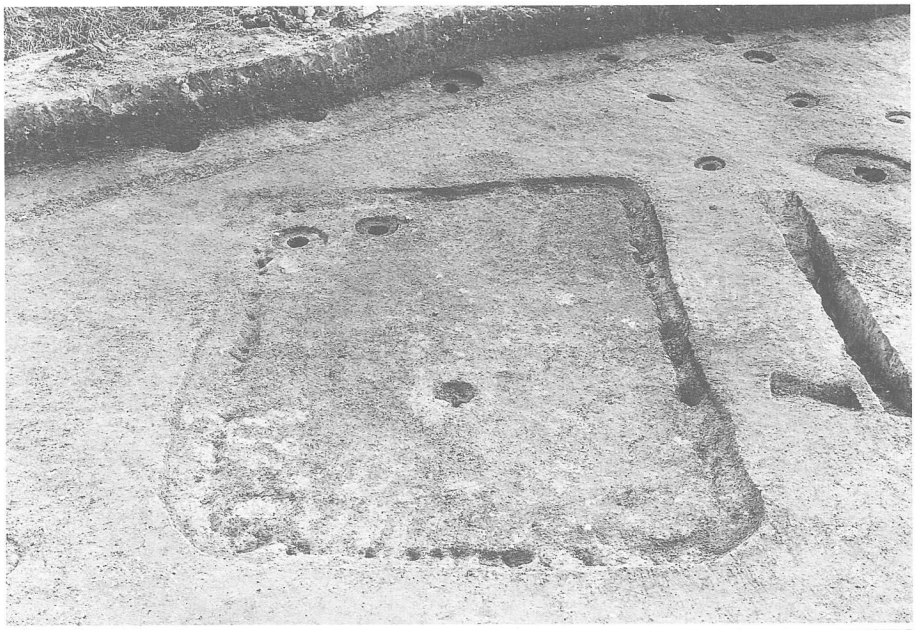
調査区全景（南西から）
（№0 ～11間）

調査区全景（南西から）
（№14～19間）

SB01（西から）

SB03（西から）

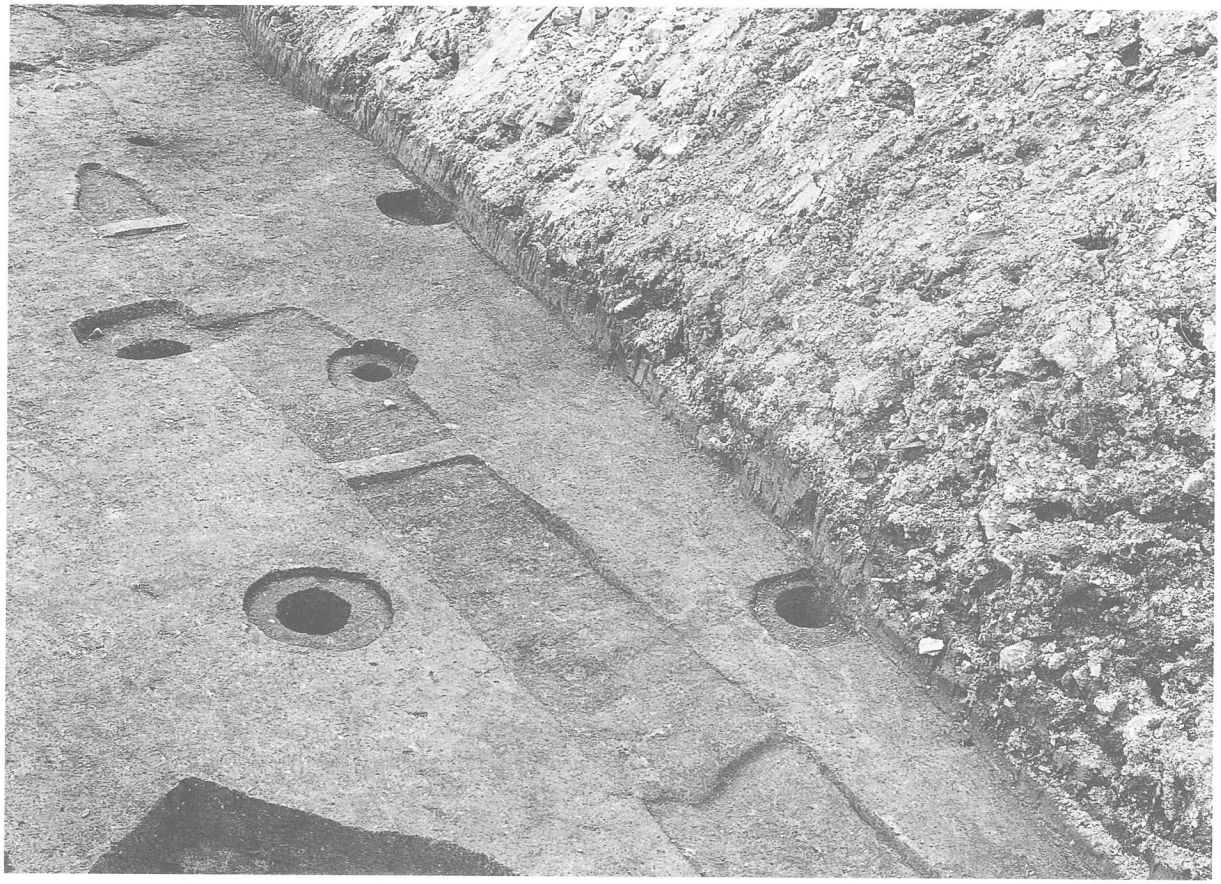
SB04（北から）



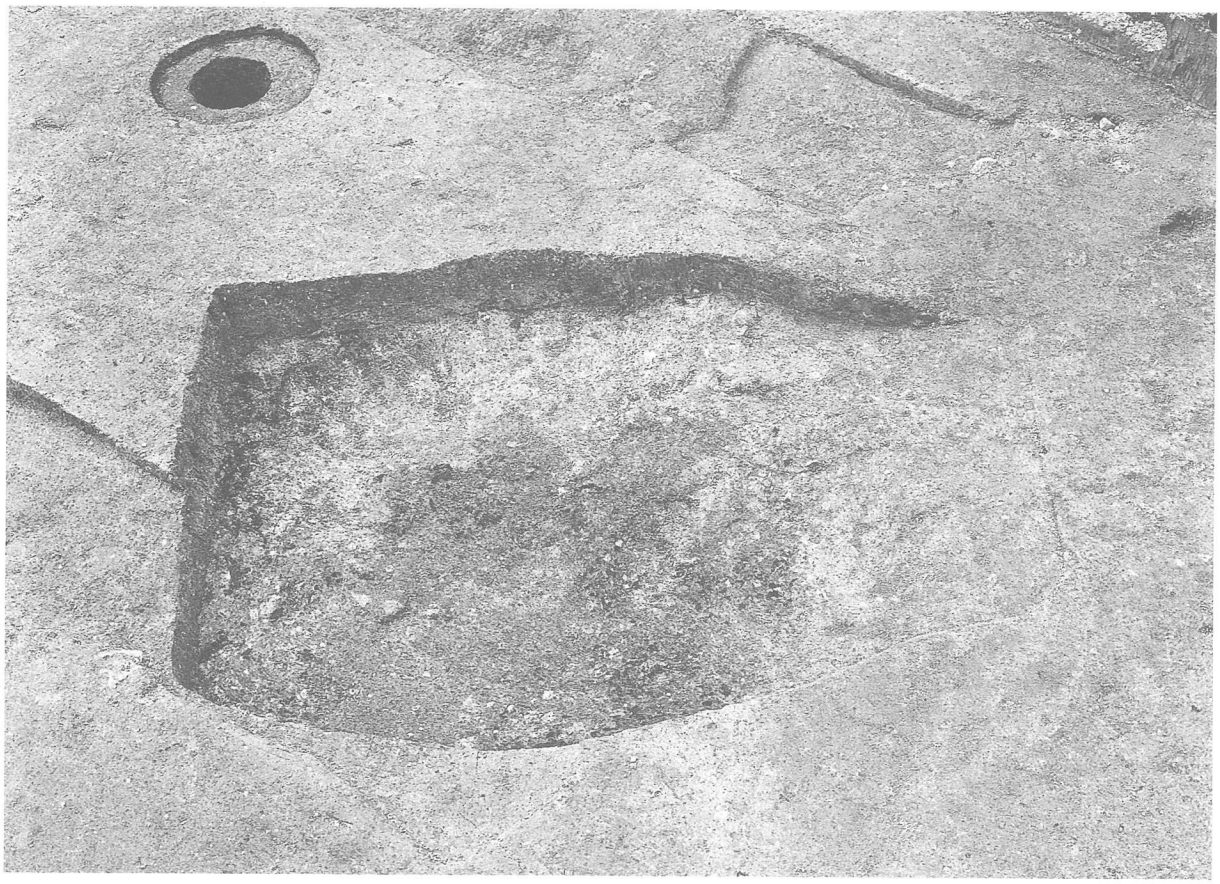
SB05（北西から）

SB06（東から）

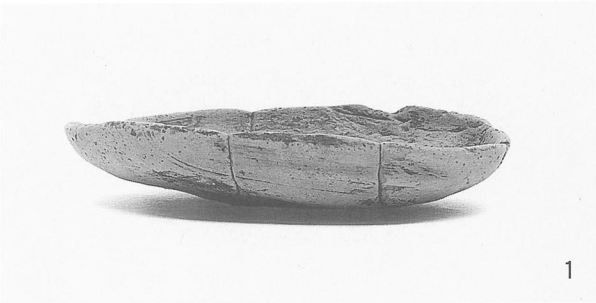
SB08（西から）



SB10（東から）



SK06（東から）


1

2

4

5

7

8

9

15

10

18

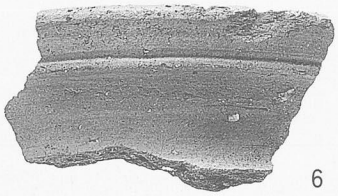
19

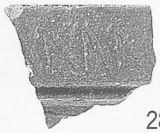
21

27

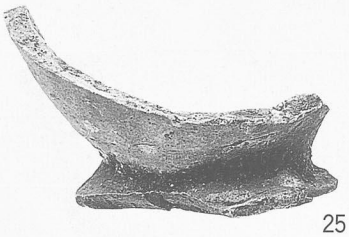
32

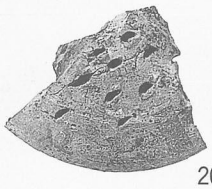
42

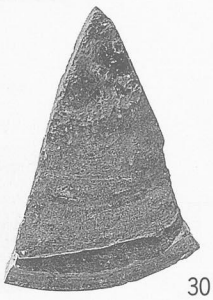

6

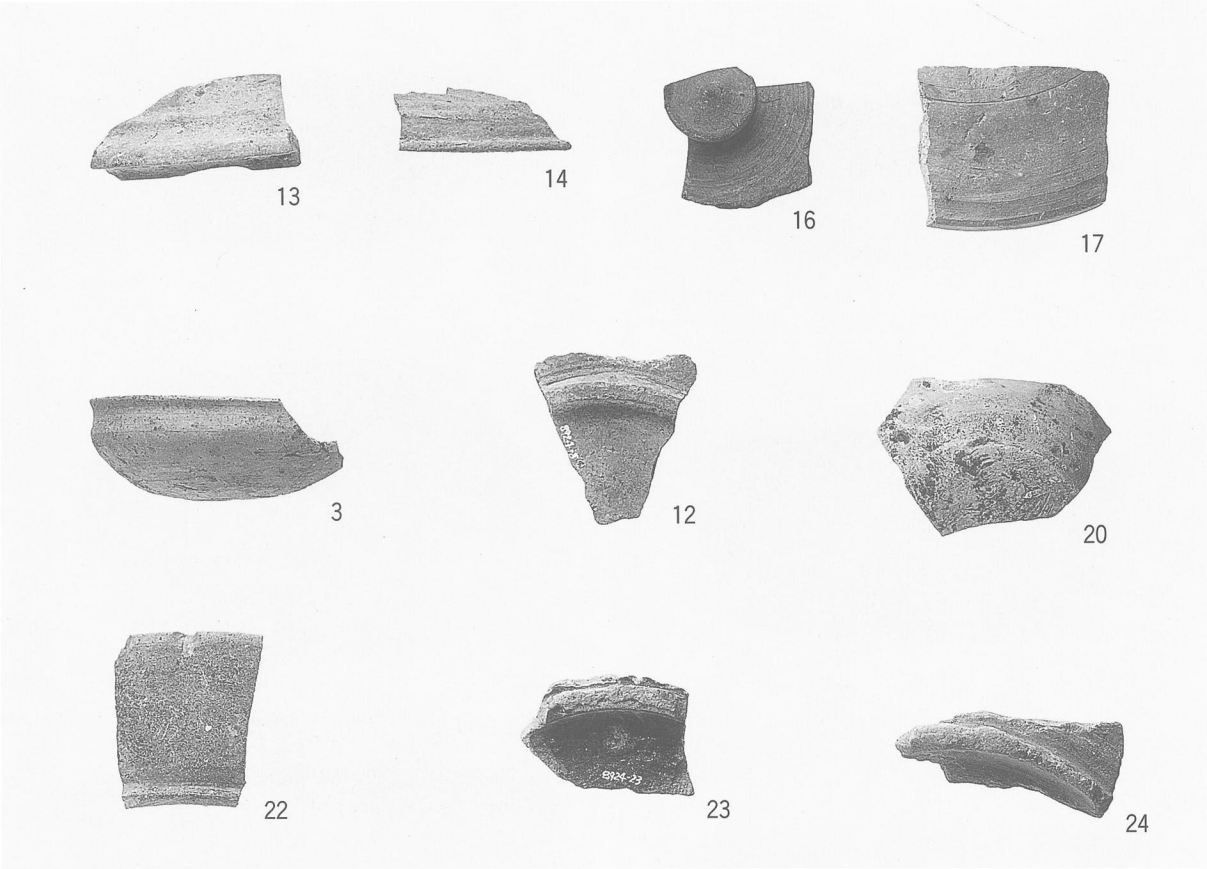

28

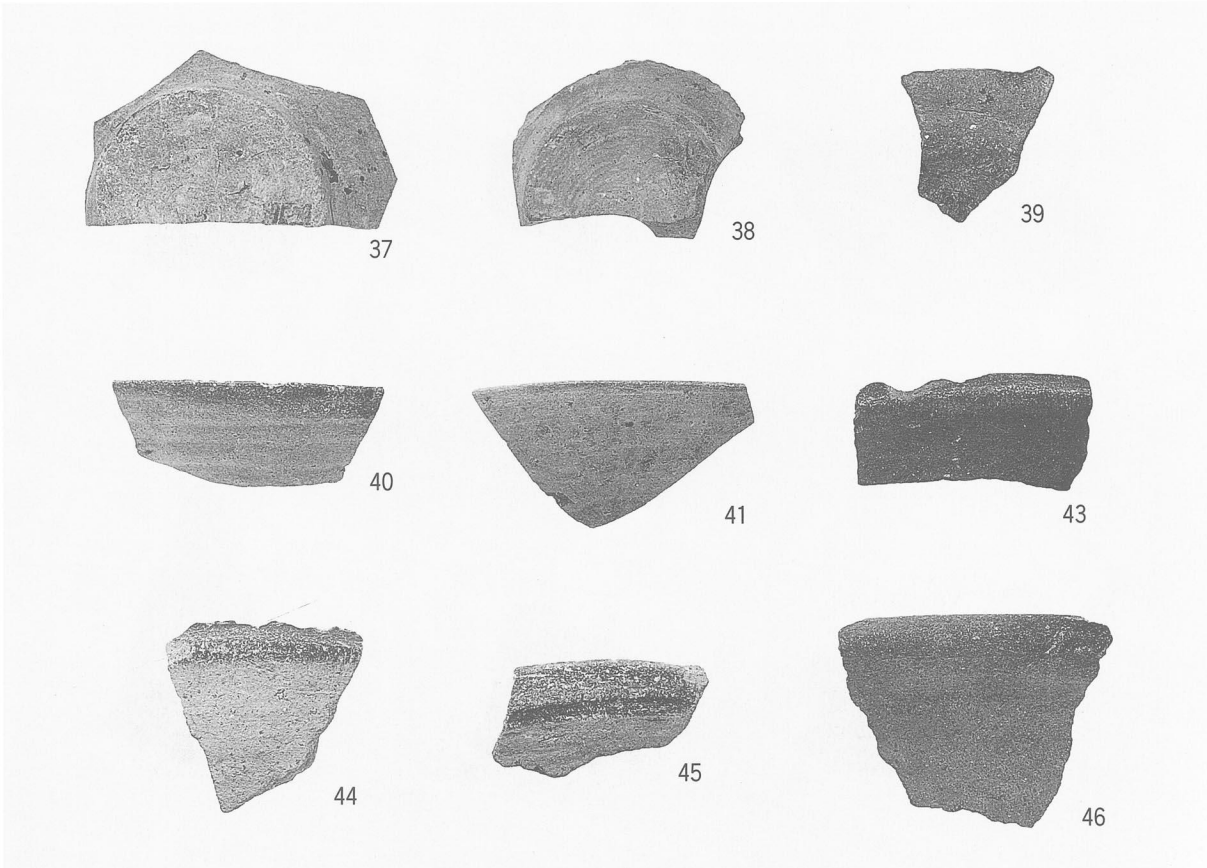
29

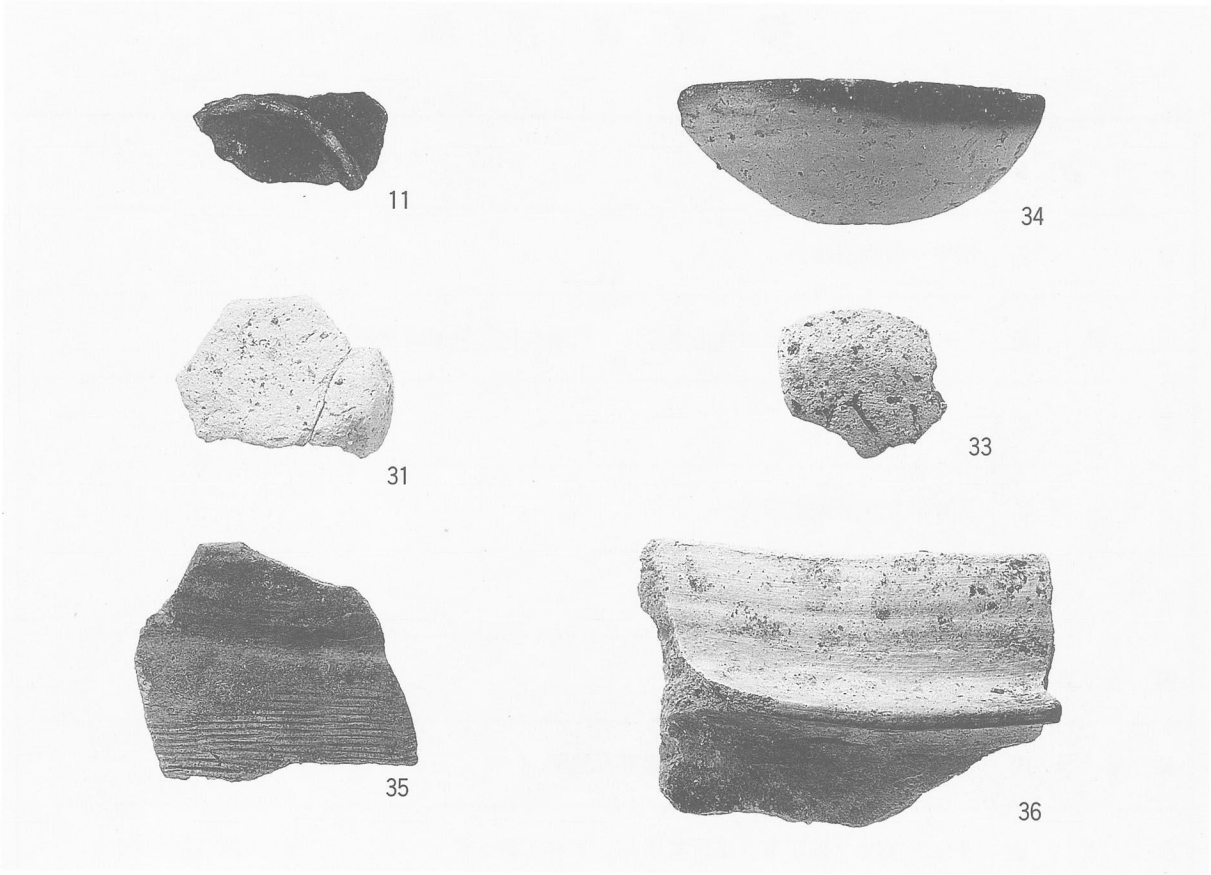

25

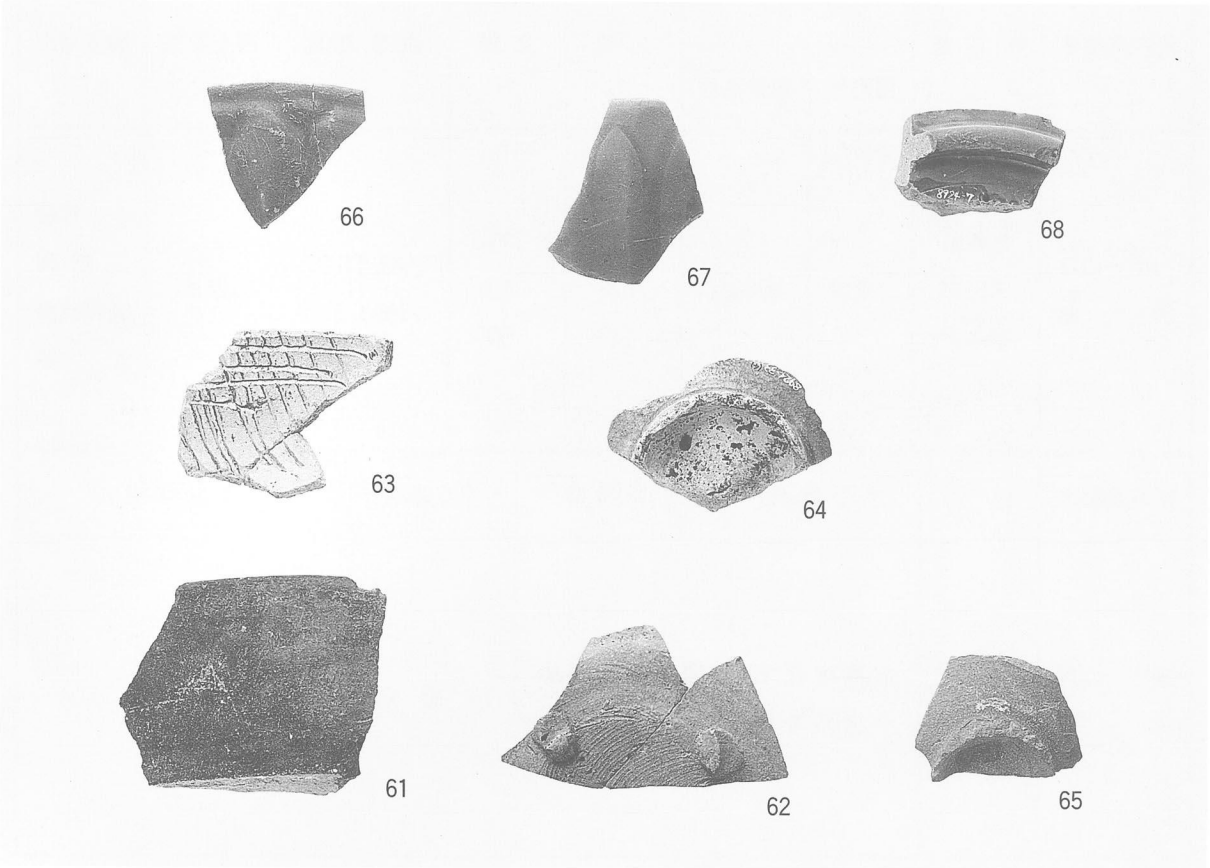

26


30


13
14
16
17
3
12
20
22
23
24


37
38
39
40
41
43
44
45
46


11
34
31
33
35
36


66
67
68
63
64
61
62
65

報　告　書　抄　録

ふりがな	たなかいちのつぼいせき
書名	田中一の坪遺跡
副書名	(一)福住三田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第247冊
編著者名	小川　良太・村上　泰樹
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL　078-531-7011
発行年月日	西暦2003(平成15)年２月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
田中一の坪遺跡（たなかいちのつぼいせき）	兵庫県（ひょうごけん）三田市（さんだし）東本庄（ひがしほんじょう）	28219	890024	34°57′14″	135°10′55″	1989.11.21～1990.1.8	928m²	(一)福住三田線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田中一の坪遺跡	集落	古墳時代末～飛鳥時代	掘立柱建物跡 竪穴住居跡	須恵器	

兵庫県文化財調査報告　第247冊

三　田　市

田　中　一　の　坪　遺　跡

―(一)福住三田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2003年(平成15年)2月20日発行

編　集　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL.（078）531－7011

発　行　　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　　水　山　産　業　株　式　会　社
〒653-0012　神戸市長田区二番町3丁目4番1号